

大学の図書館 第42巻第12号 (No.601)

2023 12

大学図書館研究会第54回全国大会記録

2023年9月23日（土・祝）～25日（月）

（会場：大阪大学豊中キャンパス・一部ハイブリッド開催）

※「研究発表」「記念講演」は対面・ライブ配信

※ 会員総会は9月16日（土）オンライン開催



目次

第54回全国大会のまとめとして	164
会員総会記録	166
研究発表（発表要旨）	171
記念講演（要旨）	174
課題別分科会	176
(1) 資料保存	(4) 大学図書館史
(2) キャリア形成	(5) 利用者支援
(3) 出版・流通	(6) 学術情報基盤
シンポジウム「大学図書館は生成系 AI の夢を見るか？」	183
ウェルカムガイダンス	184
自主企画	185
交流会	185
協賛企業・団体一覧	186
第54回全国大会 会員総会資料	187
第54回全国大会 決算報告	201
大会参加申込者名簿	215
大会運営役員名簿	216

第54回全国大会のまとめとして

常任委員会

第54回大学図書館研究会全国大会は、2023年9月16日（土）に会員総会を、また同年9月23日（土祝）から9月25日（月）の3日間、大阪大学豊中キャンパスにある大阪大学会館並びにオンライン会議システムZoomを用いた、ハイブリッド形式にて開催されました。参加者は85名となり、盛況のうちを終了しました。

新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行を受け、4年ぶりにオンサイトでの開催にこぎ着けました。なお、試行的に、1日目のみ、オンラインでも参加可能にし、ハイブリッド形式での開催となりました。

前回に引き続き、実行委員会形式での運営となりましたが、全国大会実行委員長の山口友里子さん、副実行委員長の赤澤久弥さんには大変お世話になりました。また、オンサイト大会として、とくに大阪地域グループの皆さんのお力をいただきました。篤く御礼申し上げます。

今回、初めての試みとして、会員総会を別日（全国大会の1週間前）にオンラインで開催しました。そして、全国大会1日目に研究発表・記念講演及び交流会を、2日目に6つの課題別分科会、3日目にシンポジウムを開催しました。また、自主企画を3日目終了後に開催しました。

会員総会は、第53期（2022/2023年度）の活動報告・決算報告・会計監査報告について報告があり、審議の結果承認されました。続けて、第54期（2023/2024年度）の活動計画案・予算案・役員案について審議され、承認されました。会員総会には、41名の参加がありました。

研究発表は、長坂和茂さん、若狭あやさん

による「京都大学新OPACにおける電子リソースへの誘導機能実装報告」が、また、坂本里栄さんによる「ディプロマ・ポリシーと大学図書館」の2件の発表があり、活発な質疑応答が行われました。

記念講演は、大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部の村上正行教授による「大学における教育DXと大学図書館の役割」として、教育DXやポストコロナにおける教育・学習支援を巡って、幅広い論点のご講演がありました。

また、初めて大学図書館研究会の全国大会に参加される方向けに、「ウェルカムガイダンス」を1回開催し、計10名の参加がありました。

2日目の午前は、資料保存、キャリア形成、出版・流通の3つ、午後は、大学図書館史、利用者支援、学術情報基盤の3つ、計6つの分科会を開催しました。会員が講師を務めたり、参加者同士で活発な議論が行われたりするなど、主体的な参加が目立ちました。

3日目のシンポジウムは、「大学図書館は生成系AIの夢を見るか?」が開催されました。前半は、立命館大学生命科学部の山中司教授、株式会社カーリル代表取締役の吉本龍司さんから、生成系AIについて、それぞれ大学教育への影響や蔵書検索への実装の観点から、課題と可能性を巡るご講演をいただきました。後半のパネルディスカッションでは、フロアや登壇者間の質疑や議論が活発に行われ、広く大学や図書館の展望を考える場となりました。参加者は31名でした。

自主企画は、3日目午後に「大阪大学総合図書館の特別見学会」が開催されました。同館の書庫や貴重書室の温湿度管理について、大阪大学附属図書館 図書館サービス課・特殊資料担当の久保山健さんから詳細な解説がありました。自主企画には8名の参加者がありました。

今回から、企業協賛企画として「オンライ

ンレビュー」を開催し、大会期間の前後にわたり、大会参加者のみがアクセスできるレビューページを大会ウェブサイト内に設定し、協賛企業の商品やサービスをレビューできる場を提供しました。オンラインレビューは、日本事務器株式会社様の参加がありました。その他、X（旧 Twitter）や会報を使った協賛企業の広報や、協賛企業の大会招待を通じて、図書館関係者に限らない幅広い交流の場を作ることができました。

さいごになりましたが、今回の全国大会開催にあたっては、EBSCO Information Services Japan 株式会社、NPO 医学中央雑誌刊行会、株式会社カーリル、株式会社カルチャー・ジャパン、株式会社紀伊國屋書店、株式会社規文堂、株式会社サンメディア、株式会社シー・エム・エス、株式会社樹村房、株式会社ソフエル、株式会社ネットアドバンス、日外アソシエーツ株式会社、日本事務器株式会社、日本ファイリング株式会社、有限会社藤井洋書、丸善雄松堂株式会社、株式会社メタ・インフォの各社様にご協賛いただきました。大学図書館研究会の研究活動をお支え下さり、心より御礼申し上げます。

来年の全国大会の開催形態は検討中ですが、また、みなさまにお会いできることを楽しみにしております。

大学図書館研究会第54回全国大会

会員総会記録

日時：2023年9月16日（土）10:00～11:40

場所：オンライン（Zoom）

全国大会開会宣言 上村事務局長

全国大会開会挨拶 呑海会長

出版部が担当してきた業務を整理、調整するためには時間を要するため、実施を1年延期することとなったとの説明があった。

会員追悼

物故者として、上村事務局長から以下の2名を紹介した。

・津村光洋氏

追悼の言葉：

楯幸子氏（広島地域グループ）

・仲尾正司氏

追悼の言葉：

市村省二氏（東京地域グループ）

（質疑）

・楯（広島地域グループ）：五十周年記念事業記念出版物の編集・発行が遅れているとのことであるが、各地域グループが追加の原稿を提出する必要があるのか。

→各地域グループに、今後新たに原稿の執筆を依頼する予定はない。

記念出版物の内容は、「記録資料」の部分と「大図研の活動の振り返り、寄稿」の部分から構成される。「記録資料」の部分のために、各地域グループにはこれまで原稿を執筆作成していただいております。追加の執筆依頼はない。「大図研の活動の振り返り、寄稿」の部分の作成が遅れており、当初、各時代の活動に関わった会員に原稿の執筆を依頼する予定であったが、依頼はせず、全国大会課題別分科会「大学図書館史」にて報告された資料に基づいて、編集委員にて作成することを考えている。

発行が遅れているため、刊行時期の見通しの間合せや資料作成に関してご協力のお声がけをいただいているところ申し訳ない。今年度（2023/2024年度）に発行できるように進める。（北川五十周年記念事業記念出版物編集委員長）

→記念出版物の発行が遅れており申し訳ない。よいものを出版するように取り組んでおり、時間がかかっているが、お許しいただきたい。（呑海会長）

会員総会開会

会員総会議長選出

立候補なし

事務局から以下の2名を推薦し、挙手にて承認された。

山下大輔氏（九州地域グループ）

川崎陽奈氏（九州地域グループ）

◆第1号議案

第53期（2022/2023年度）活動報告

・活動日誌

・地域グループ報告

・研究グループ報告

・常任委員会等

上村事務局長から、事務局の活動について、前年度に引き続き、事務局本体と本体に内包される出版担当、会計担当、会費徴収担当、組織担当の各担当にて事務処理を進めたとの報告があった。

大図研出版部のアウトソーシングに関しては、実施を予定していたが、長期間にわたり

- ・野村（東京地域グループ）：大図研の現在の会員数は、決算報告に書かれている人数でよいのか。また、ここ数年の会員数の変動状況を教えていただきたい。

→現在の会員数は、決算報告に書かれている人数より若干増加している。

最近の会員数の変動は、若干の微増傾向にある。会員数の増加はうれしいことであるので、折に触れて広報しているところである。（上村事務局長）

- ・野村（東京地域グループ）：常任委員会、全国委員会の活動に関して、議事要録がウェブサイトに掲載されていて素晴らしいのだが、項目名の列挙が中心で審議の内容が分かりづらいので、内容を簡潔に記載していただくか、煩雑であれば、会議開催の事実のみを記す形式としてもよいのではないか。

→議事要録の掲載について、現在の常任委員会の体制では、現状の掲載方法以上の対応は難しい。一方、何が議論されてどのような結果になったのかを会員の皆様に報告することは必要なことであるので、検討したい。（上村事務局長）

→問合せがあればお答えするようにする。周知させていただきたいことは、内容を精査した上で、会報などを利用してお伝えしている。ご指摘をお受けしつつ、できる範囲で対応していく。（呑海会長）

（採決）承認

◆第2号議案

第53期（2022/2023年度）決算報告・会計監査報告

上村事務局長から以下の説明があった。

- ・2022/2023年度一般財政決算報告：（収入）会費が予算額を上回ったこと、大会基金から繰入があったこと、旧埼玉地域グループ活動費寄附があったことなどにより、予算を超える収入があった。

（支出）「通信費」は新型コロナウイルス感染症対策を含めた予算額とし、「交通費」は、新型コロナ収束後の委員会開催を想定した予算額としたが、「通信費」、「交通費」とも、予算額までの執行はなかった。その他、経費削減に努めたため、新型コロナ禍の影響はあるとしても、全体的に小規模な執行となった。

- ・2022/2023年度大会基金：適切に執行され、かつ予算を上回る収入があった。「決算が100万円を超えた場合は一般財政に繰り入れる」との事項が適用された。

- ・2022/2023年度出版財政：収入に関しては、「刊行物収入」が前年度と比べて若干の増額、支出に関しては、アウトソーシングを1年延期したことにより「出版物販売委託費」は未執行となった。

- ・2022/2023年度五十周年事業基金：予算執行を伴う活動がなかった。

- ・2022/2023年度会計監査報告（伊賀由紀子 会計監査人）

（質疑）なし

（採決）承認

◆第5号議案

第54期（2023/2024年度）役員案

呑海会長から、役員案（全国委員、会計監査）、常任委員候補者が提示され、上村事務局長から、全国委員の新任候補について、補足説明があった。

会員総会中の全国委員立候補者はなかった。

新任候補となる2名から挨拶があった。

（質疑）なし

（採決）承認

休憩 10:42～11:00

休憩中、第55期（2023/2024年度）第1回全

国委員会が開催された。

休憩後、呑海会長から、第1回全国委員会の開催報告があった。

- (1) 会長・副会長・事務局長選出結果報告
会長：呑海沙織
副会長：赤澤久弥
事務局長：上村順一
- (2) 次期の全国大会報告
呑海会長から、開催方法、オンサイト開催の場合の開催地について、現時点では未定であるとの報告があった。
- (3) 会長・副会長・事務局長挨拶

◆第3号議案

第54期（2023/2024年度）活動計画案

呑海会長から、活動計画案に関して、地域グループ及び研究グループを核として活動すること、研究グループには現在活動している長期的研究グループのほかに萌芽の研究グループという短期の研究のための枠も設けているので希望があれば応募していただきたいことの説明があった。また、会議体に関して、常任委員会及び最上位の決議機関である会員総会から成る体制には変更がなく、前期に引き続き、活動にご協力願いたいとの説明があった。

上村事務局長から、全国委員会の開催方法に関して、原則としてオンラインとするが、1回はオンサイトで開催することを考えているとの補足説明があった。ただし、オンサイト開催では、移動のための時間やコストの負担があるため、オンサイト開催を実施するかは、現時点では未定である。その他、事務局出版担当に関して、大図研出版部のアウトソーシングに伴う継続課題に取り組んでいくとの意向が出された。

呑海会長から、2023年11月からの出版部のアウトソーシング化に関して、これまでの8年間、出版部をお引き受けくださった、運営

サポート会員の市村さんほか和光大学の皆様のご尽力に対して謝意が述べられた。

(質疑)

・加藤（千葉地域グループ）：大図研ウェブサーバの新サーバへの移行により、メーリングリストの利用に影響はあるか。千葉地域グループのメーリングリストは現行のサーバを利用しているため、教えてほしい。
→メーリングリストは、新サーバにて、特に支障なく利用できる予定である。（上村事務局長）

→サーバ移行期間は、メーリングリストは利用できない。サーバ移行の前後で、メーリングリストを利用している地域グループには作業を依頼する可能性があり、その際にはご相談させていただく。（磯本特定常任委員）

・加藤（千葉地域グループ）：会報編集委員会の活動計画案に目次情報の正規化が挙げられているが、過去分の遡及は検討されているのか。

→目次情報の遡及は考慮していなかったの
で、今後の検討課題とさせてほしい。（上村会報編集委員）

加藤：目次情報の遡及入力に協力するにやぶさかではないので、遡及を検討する際は、全国委員会のメーリングリストなどで議論していただきたい。

(採決) 承認

◆第4号議案

第54期（2023/2024年度）予算案

上村事務局長から、予算案は、前年度の実績に基づいて組んだ旨の説明のほか、以下の補足説明があった。

会員総会資料の以下の費目の記載に誤りがあり、修正した内容を会員総会資料と同じウェブページに掲載した。なお、「大会記録号」である、会報2023年12月号には修正した会

員総会資料を掲載する。

- ・2023/2024年度一般財政予算案 <収入の部>:「前年度予算額」の「前年度より繰越」と「合計」、それぞれの「差引額」。
- ・2023/2024年度一般財政予算案 <支出の部>:「前年度予算額」の「予備費」と「合計」、それぞれの「差引額」。
- ・2022/2023年度大会基金<支出の部>: 予算額」の「来年度大会会計への支出」と「合計」、それぞれの「差引額」。
- ・2023/2024年度一般財政予算案:
(収入) 前年度からの変更点は、「出版財政より繰入」の費目がなくなったこと、「雑収入」を減額としたことである。「雑収入」の減額は、前年度は旧埼玉地域グループからグループ費残額の寄附があったことを踏まえての増額を反映したものであり、前々年度に準じた予算額とした。
(支出) 費目に、新たに「事務管理費」を設けた。前年度は事務局外注費を「雑費」からの支出としたが、「事務管理費」を設け、この費目からの支出とすることとした。「事務管理費」には、常任委員会で情報共有媒体として使用しているMS365等の使用料も含める。「通信費」、「交通費」は、前年度はほぼ未執行であったが、第3号議案の補足説明を踏まえ、前年度と同額で計上した。「助成金」は地域グループの年度期首所属人数により算出している。
雑費は、事務局外注費を事務管理費としたこと、大図研ウェブサーバ移行の初期費用がなくなるため減額とした。
- ・2023/2024年度大会基金予算案: 次回全国大会の開催方法は未定であるが、<支出の部>の「来年度大会会計へ支出」の予算額は、ハイブリッド開催の可能性を考慮して計上した。
- ・2023/2024年度出版財政予算案: 出版部のアウトソーシングにより、<支出の部>の「組入金」、「会報発送委託費」、「会報発送費」

の費目を抹消した。

- ・2023/2024年度五十周年事業基金予算案: 記念出版物編集のための予算を計上しており、今年度での全額執行を予定した予算案とした。

(質問・意見)

- ・加藤 (千葉地域グループ): 一般財政予算案の雑費に表彰制度設計等の経費が計上されているが、これはどのようなものか。
→大図研の運営への取り組みや会誌への掲載論文など、大図研の活動を対象とした表彰制度の創設を数年前から提起しているが、現在のところ、議論を進めるに至っていない。表彰制度設計等のために2万円を計上しているが、実施が難しいこととなれば、次年度以降は取り下げる。表彰制度についてご意見をいただきたい。
(呑海会長)

加藤: 他団体では、図書館員のグレード制があるので、グレードの申請へのポイントとなるのであれば有効かもしれない。

→表彰制度には、推薦、選定、発表という工程があり、現在の人的リソースでは対応が難しいと考えている。表彰制度の創設に関してのご意見を常任委員会まで寄せていただきたい。(呑海会長)

(採決) 承認

議長解任

議長への謝辞: 上村事務局長

会員総会終了

研究発表

9月23日(土・祝) 14:30～15:15

京都大学新 OPAC における 電子リソースへの誘導機能実装報告

長坂 和茂(京都大学法学部図書室)
若狭 あや(京都大学附属図書館)

(発表要旨)

はじめに

京都大学では2023年8月に図書館システムのリプレイスを行いました。ベンダも変更となり、大きなリプレイスとなりましたが、無事新システムを予定通り稼働させることができました。

その中で、OPACからの電子リソースへの誘導方法として、新たな取り組みが2点ありますので、紹介いたします。

京都大学蔵書検索システムKULINE(以下、KULINE)は、これまでも電子リソースの発見可能性を上げるための取り組みを行ってきました。

今回のリプレイスでもこれまで京都大学が行ってきた取り組みをより発展させることができたといえます。具体的には、1点目は、国立国会図書館デジタルコレクション書誌のOPACへの取り込み。2点目がCiNii Books APIを使用したデジタル化資料へのリンク形成です。

1点目の国立国会図書館デジタルコレクション書誌のOPACへの取り込みについて紹介します。

これまでKULINEでは、電子リソースの書誌を主に出版社から提供されるMARC(MARC21形式、CATP形式)を取り込むことで作成してきました。しかし、それらが提

供されない場合には、電子情報資源管理システム(以下、ERMS)のデータを元に簡易な書誌を作成してきました。国立国会図書館デジタルコレクションで提供される電子化資料もその一例です。

この、ERMSのデータを元に作成した簡易データには、大きく2つの課題がありました。1つ目は、ERMSに登録されている情報のみを元に書誌を作成するため、簡素なデータとなることです。2つ目が、世界中のオープンアクセスの進展により、対象となるデータ量が多くなったことにより、書誌作成に時間がかかるようになったことです。

そこで、リプレイスを期に国立国会図書館デジタルコレクションで提供される京都大学で利用可能な資料(国立国会図書館参加館内公開およびインターネット公開の資料)について、直接国立国会図書館から書誌データを取り込む機能を実装し、リッチな書誌が作成できるようになりました。

続いて2点目のCiNii Books APIを使用したデジタル化資料へのリンク形成を紹介します。

これまでのKULINEでは、書誌にISBNやISSNがある場合はそれを使って、無い場合はタイトルを使ってリンクリゾルバのAPIを検索し、冊子体の書誌に電子リソースへのリンクを表示させていました。

この方式は、書誌にISBNやISSNがない場合に課題がありました。タイトルによる検索は誤リンクが多く、ブラックリスト・ホワイトリストを整備しなければなりません。また、タイトルが書誌と異なる場合には、自館で電子化した資料であっても表示させることができませんでした。

そこで、まずは国内資料で電子化公開された資料を対象としてERDB-JPのデータをNACSIS-CAT書誌IDで検索し、その結果を表示することを考えました。ERDB-JPには検索用WebAPIが無かったため、CiNii BooksのAPIから取り込むこととしました。これにより副産物として国立国会図書館デジタルコレクションやHathiTrustのデータを表示させることもできるようになりました。

まとめ

今回発表した新機能2つには共通する特徴があります。それは、公開されたメタデータ、いわゆるLinked Open Dataを使用していることです。そのため、ERMSやリンクリゾルバを別途契約している必要がありません。技術的にも、図書館システムベンダから見れば簡単な内容と言えるでしょう。興味を持った大学図書館があれば、是非真似して頂きたいし、可能であればこの内容をさらに発展させて、その内容を同様に共有して頂きたいと思えます。

本発表が、京都大学という一大学内のみならず、日本全体の電子リソースの発見可能性向上に資することを願っております。

参考文献

1. 塩野真弓. “京都大学におけるEリソース管理の現状と課題”. 第4回 SPARC Japan セミナー 2013. https://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/pdf/20131219_1.pdf. (参照 2023-8-9).
2. 大西賢人, 鳥谷和世, 柴田育子. CiNii Booksとデジタル化資料データベースとの連携をめざして - IDマップを利用したデータベース間リンクの可能性. 大学図書館研究. 2016, 104, p.34-45.

(長坂和茂／京都大学法学部図書室)
(若狭あや／京都大学附属図書館)

ディプロマ・ポリシーと大学図書館

坂本 里栄 (西南学院大学図書館)

1. 研究の背景と目的

本発表では、西南学院大学を事例に、大学図書館の諸活動がどのように学修成果に関与し、教育を支えているのかについて可視化を試みた結果を共有する。大学図書館は、資料の提供や学修空間の整備など、学生の学びを支援してきたが、具体的にどの程度教育への貢献をしているのか、大学全体の教育活動中での位置づけの難しさに課題を感じていた。一方で、現代の高等教育政策では、学修者本位の教育や学修成果の可視化が推進されており、西南学院大学でも2023年度から3つのポリシーが刷新され、新しい教育課程がスタートした。この文脈で、大学図書館の諸活動とディプロマ・ポリシー（以下、DP）の関連を明らかにすることは意義があると考えた。

2. 検討方法

西南学院大学の3つのポリシーは、三層構造となっており、DPは直接的に学修の成果に関わることから、この部分について図書館が関与することの重要性を意識し、整理することとした。図書館は、全学部・学科をサービス対象としていることから、共通のDPである第一層の観点に着目した。第一層のA～Dの4つの観点別に、図書館の諸活動を整理することで、各観点との関連性を可視化した。検討の過程では、図書館や認証評価関連部署の役職者からフィードバックを受けた。

3. 結果

検討結果には、場所としての図書館の有用性や政策としての予算編成・執行、インフラ整備、学外協力などが抽出された。検討結果の詳細な表は、坂本里栄 (2022). “図書館から学修支援を考える：ディプロマ・ポリシー

と大学図書館”。西南学院大学図書館報193.
https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/files/uploads/bulletin_193.pdfに掲載している。

4. 考察

検討結果で述べたとおり、場所としての図書館、インフラ整備、学外協力といったことがDPと関連した諸活動として抽出された。

大学設置基準の改正が検討されるなか、場所としての図書館や司書の専門性について議論が起きている。しかし、検討結果から、大学設置基準第38条（教育研究上必要な資料及び図書館）で議論となっている図書館職員の専門性とDPの観点から見た図書館の諸活動とは、必ずしも一致していないことが見えてきた。また、これらは認証評価制度において必ずしも評価の対象として明文化されていない現状がある。今後の議論によっては、大学が策定したDPの観点と大学図書館の諸活動との関連性や貢献度が、大学設置基準や認証評価の評価項目に組み込まれていくことも考えられる。

本発表では、DPと大学図書館の諸活動との関連性に焦点を当てることで、現行の大学設置基準や認証評価、大学の策定する3つのポリシーといった教育政策と大学図書館の諸活動との整合性について示唆することができた。DPをはじめとした3つのポリシー等の大学の教育政策を裏付けとして図書館の役割を検討することは、図書館職員が大学内の教育活動への洞察を深めるとともに、「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について(審議のまとめ)」で提示された「ライブラリースキーマ」を定義するための重要なアプローチとなり得る一定の可能性を示唆することもできたと考える。

5. 今後の課題

本発表では、大学図書館に焦点をあてたが、教育を支える部署や人材はほかにも多数あ

る。実際には、他の部局との連携や協力が必要であり、これらを考慮する必要がある。また、国公立大学それぞれの置かれている状況が異なることを考慮できていない。より研究を深めるには、理論的背景の十分な分析や他校との比較、多様な視点からの検討が不可欠であり、大学図書館の影響を定量的に評価することも重要となる。今後のさらなる研究や議論を通じて、大学図書館の役割がより一層明確化されることを期待したい。

6. おわりに

本発表は、令和4年度大学図書館職員長期研修の事後課題から個人的な検討として試みた、ディプロマ・ポリシーと大学図書館の諸活動との関連についての検討結果を西南学院大学図書館報193号に掲載した記事を元としている。大学図書館研究会のメーリングリストでの議論から関心をいただき、今回の研究発表の機会を得ることができた。本発表は、「研究」にまでは至っていないが、検討のプロセスと結果を共有することで、参加者各自が新たな考えを模索する機会となることを期待したい。

(坂本里栄／西南学院大学図書館)

記念講演

9月23日(土・祝) 15:30～16:30

「大学における教育DXと大学図書館の役割」

村上 正行(大阪大学 全学教育推進機構
教育学習支援部 教授)

(要旨)

「大学における教育DXと大学図書館の役割」の講師は、この度の大会の会場となった大阪大学の村上正行教授である。

村上先生のご専門は教育工学・大学教育学で、教育改善のためのデータ分析、ICTを活用した教育、大学教育の改善・FDに、研究と実践の双方から取り組まれている。学内の幅広い部局と連携されているが、附属図書館もその例外ではなく、館内のラーニングコモンズ¹⁾で学習支援を行う大学院生TAのための研修を実施いただいている。

本稿の著者は附属図書館で学習支援サービスを担当する職員の一であり、この講演をとても楽しみにしていた。

講演では、「大学における教育DX」「コロナ禍のオンライン授業」「コロナ禍におけるラーニングコモンズ・学習支援」といったテーマについて関連する研究や先生ご自身の取り組みをご紹介いただいた後、大学図書館に向けて、学習支援のあり方を検討するにあたり重要なのはまず各大学における学習目標を明確にすることとの提言をいただいた。

この講演の直前のプログラムは、西南学院大学図書館の坂本里栄氏によるディプロマ・ポリシーと大学図書館の諸活動の関係性についてのご発表であり、奇しくも図書館と研究者それぞれの立場から、大学が目指す教育像に立ち返ることの重要性が強調されることと

なった。

講演で取り上げられた研究や実践のほとんど全てが、ここ5年の間に世に出たものであった。それほど僅かな間に、大学での教育・学習をめぐる環境は変貌を遂げている。

例えば、教育DXの実現が国家レベルの課題となる中、本学でも教育・学習活動にまつわるデータの利活用に向けてSLiCSセンター²⁾が発足した。

また、一時はキャンパスへの入構さえままならなかったコロナ禍を経て、対面とオンラインの組み合わせによるブレンディッド型授業が選択肢として定着した。IT活用による高等教育の発展を図るEDUCAUSEは、コロナ禍で浮上したニーズや新しい技術をふまえ、学習スペースの評価システム(LSRS)を刷新した³⁾。コモンズなど正課の授業以外の学習の場にも適用できる拡張版LSRSの開発を試みる研究もある⁴⁾。

さらに注目すべきは生成AIのめざましい発展と普及である。本学では総長名義による学生へのコメント⁵⁾や、村上先生が所属される全学教育推進機構教育学習支援部による「生成AI教育ガイド」⁶⁾が公開されている。

研究・教育・学習活動の元手になる学術情報を収集・整理し、利用者に提供してきた図書館であったが、有効な学習支援のために、緊密な学内連携とそれをふまえたサービスの再検討は必須と感じた。変わるべきところは変わりつつ、引き続き学生の成長をサポートする図書館でありたいと思う。

注・参考文献

1. 大阪大学附属図書館における呼称は「ラー

ニング・コモンズ」だが、本稿では講演資料での表記に倣って「ラーニングコモンズ」の表記を採用した。

2. 大阪大学チューデント・ライフサイクルサポートセンター. “SLiCS”. 大阪大学チューデント・ライフサイクルサポートセンター ホームページ. <https://slics.osaka-u.ac.jp/>, (参照 2023-10-28).
3. EDUCAUSE. “Learning Space Rating System”. EDUCAUSE. <https://www.educause.edu/eli/initiatives/learning-space-rating-system>, (参照 2023-10-28).
4. 浦田悠. 学習スペースの評価システム (LSRS) 拡張版の開発. 大学教育学会誌, 2023, 45 (1), p.100-104.
5. 大阪大学. “生成 AI (Generative AI) の利用について”. 大阪大学ウェブサイト. 2023-04-17. <https://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/topics/2023/04/17001>, (参照 2023-10-28).
6. 大阪大学 全学教育推進機構 教育学習支援部. “生成 AI教育ガイド”. 大阪大学 全学教育推進機構 教育学習支援部ウェブサイト. https://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/project/generative_ai/, (参照 2023-10-28).

(坂田絵理子 / 大阪大学附属図書館)

課題別分科会

9月24日(日)

9:30 ~ 12:30 第1 ~ 3分科会

14:00 ~ 17:00 第4 ~ 6分科会

第1分科会 資料保存

テーマ：資料保存技術の継承と伝達

担当者：山上朋宏、北川正路

参加者数：11名

司会者：山上朋宏、北川正路

報告者：

永田千晃（京都大学）

北川正路（東京慈恵会医科大学国際交流センター）

配布資料：事後にメールにて配布・共有

合言葉は『共有大事』。

前半は京都大学永田氏から、有志グループ『修理系司書の集い』が、図書館総合展2022ポスター発表で行ったアンケートの集計結果（総合展アーカイブ参照）を中心に報告が行われた。アンケートのテーマは「館内修理」。館種に関わらず行うであろう業務の実態に迫る試みであった。アンケート全体の総括だけでなく、設問1問ごとに分析を重ねることにより、より細かく実態が浮かび上がる。結果、ほとんどの館で行われているにも関わらず、業務としては軽視されていることがわかってきた。「困っていること」という設問に対し「時間が無い」という回答が圧倒的に多いこと、また道具や材料の入手先、具体的な修理方法での悩みも多いことから、時間内の業務としてきちんと確立されておらず、担当者個人の力量やモチベーションに依存している部分が多いことがうかがえた。先輩や前任者からのマニュアル的なものや、道具・時間等の確保があるなしでも、差が出るだろう。司書資格と修理・製本関連の知識がイコールではないこと、また図書館職員（特に正規職員）

の数が減っている現場も多い中で、最低限の情報の共有や作業時間の確保ができるようにもっていくのは非常に難しいと思われる。が、確実に必要な業務であることなので、各館ごとに何とか工夫していきたいものである。

後半は東京慈恵会医科大学の北川氏から、史料室の展示ケースにまつわる顛末について語られた。件の展示ケースには、学祖関連の品々が収められており、通常図書館で扱う資料（主には図書）とは異なる、絵画や遺墨、軍服といった史料が飾ってあるとのこと、その中でケース内のカビ汚染が数年の間に2度発生したとのことだった。1度目はケース内の燻蒸清掃および、カビ汚染の主となる軍服のクリーニングや修復などが行われたが、史料室やケースへの手当は特になされなかったそう。その時の経験を共有できないままの管理（湿度調整その他）となり、数年後2度目のカビ発生につながったようだ。2度目の際は、展示物を燻蒸・清掃・修復・トランクルームでの保管の流れで救うと同時進行で、展示ケースの方も改修を行い、湿度管理空調システム等の設置がなされたそうなので、顛末の継承も含め今後は安定して展示・保管されることだろう。衣類のような史料は保管や修復が非常に難しいこと、図書の保管とは異なる知識が必要であることなどが補足された。場所の改修や機器導入などは予算が動くこともありなかなか難しいかもしれないが、出来事の情報や教訓などの情報共有により、再発を未然に防ぐことも可能だったかもしれないという内容だった。

近年主流の「デジタル化」や「システム化」とは異なるが、昔から図書館がもっている大

切なものについて、あらためて考えさせられた分科会でした。

(渡邊さよ／広島経済大学)

第2分科会 キャリア形成

テーマ：大学図書館員と研究活動—社会人大学院生の学びとキャリア—

担当者：中川恵理子、有馬良一

参加者数：18名

司会者：中川恵理子

報告者：

佐藤正恵（千葉県済生会習志野病院）

井上昌彦（関西学院大学）

久保山健（大阪大学）

配布資料：

- ・「働きながら学ぶ 大学院進学とキャリア形成」(佐藤氏)
- ・「同志社大学への進学」(久保山氏)

第2分科会は、講師のお三方からそれぞれのご経験に基づいた発表があった。

最初にお話しいただいた佐藤氏は、大学院はプロになる（である）ためのスタートラインであり、在野の研究で独りよがりにならないため、アカデミック・ディスカッションの場、大学の持つ資料リソース、人的リソースは貴重だと見解を示された。実際に学位を取る過程については、自分の専門を把握すること、ロールモデルを探ること、研究対象へのアプローチ、希望する指導教官の研究デザインへの理解、PICOフォーマットやIMRAD形式を活用した情報整理や研究計画作成など、多岐にわたる大変実践的な話を伺えた。所属組織と関連付けたキャリア形成、一週間のタイムマネジメントの実例は詳細かつ計画的であり、まさにご自身がロールモデルとなられたお話で、実務家が海外で積極的に発信する重要性など国際的な視野も示された。

続いて井上昌彦氏からは、何歳までに何をするか、キャリアを終えた後何をしたいか、

という自分の生き方を考えて大学院という選択肢を取ったというお話があった。色々メリットを考えた上で、進学しないという選択肢もありうる。院で良かった点としてはアカデミックな世界を体験することで、人脈を広げたり業務に活用（教員サポート等）したりすることができる。考慮すべき点としてはコストとのバランス、ライフスタイル、休職や給付金などの諸制度の活用などの他、指導教官の定年の時期、病気など自分や家族に予期せぬ変化が起こった際にどうするか、といった点まで氏の個人的な経験を含めて率直にお話いただくことで、参加者に大きな示唆を頂いたように感じた。

久保山氏からは、大学院を目指した動機や入学するまでのリサーチ内容、研究計画の立案過程、経費について、参加者からの事前の質問への回答を挟みつつ詳細なお話があった。進学については井上氏同様に業務への活用や人との交流といった点の他、研究手法や物の見方（科学性・客観性）を習得できる、既知の知識を深化させられるといったことをメリットとして挙げる一方、生活や金銭面、氏の経験された授業の実態等からくるデメリットについても触れられた。「実務・実践」と「理論・研究」の狭間の問題など大学院教育の抱える課題、個人の成長以外に業務上のメリットは何かなどキャリア形成に及ぼした影響についても言及され、大学院の実情をよりリアルに感じさせるお話であった。

最後に質疑応答と意見交換を通して、

- ・周囲の理解について。カミングアウト効果もあるが、上司や部局が無理解なケースも見られる。そもそも申告の必要性はあるか？
- ・大学院の選択。ここ、と決めずに複数の院や教員を選択肢に含む。途中で研究テーマが変わるケースや、教員との相性といった面も考える。院の募集停止といった問題も。
- ・毎日の乗り切り方。やらないことリストを作る、仕事のできる人をペースメーカーに。

・今後の展望。未熟でもよい、優先順位を付けてやりたい事や出せるものから出していく。

ということが共通認識の形でまとめられた。

今回の分科会はリカレント教育の難しさも感じつつ、大学院の有効性やキャリアの選択肢の拡大を考える上で有益な内容であった。

(野村 健／丸善雄松堂・

大東文化大学東松山図書館)

第3分科会 出版・流通

テーマ：学術コミュニケーション入門：大学図書館員が知っておきたいこと

担当者：楫幸子、吉田弥生

参加者数：23名（講師1名、報告者2名含む）

司会者：吉田弥生

報告者：

宮入暢子（学術コミュニケーションコンサルタント）

楫幸子（安田女子大学図書館）

吉田弥生（大阪大学附属図書館）

配布資料：なし

本分科会は、昨年10月に出版された『学術コミュニケーション入門：知っているようで知らない128の疑問』、リック・アンダーソン著、宮入暢子訳（以下「テキスト」という）の内容を理解し、それに関連する質問や意見を交換する読書会として開催された。始めに訳者である宮入暢子さんから出版の背景などのお話があり、次に分科会担当者のお人に、テキストの核心的な部分である第12章及び第13章を中心に、レクチャーしていただいた。そのうえで宮入さんに補足とコメントをいただき、参加者から質問、意見を出し合うという形である。

お二人の報告者が説明してくださったことは、「学術コミュニケーション」を考える上でポイントとなる重要事項であった。が、それは、基本的にテキストを読んでいただければ

よいことなので、ここでは割愛し、私の印象に残ったことだけを述べることにする。

分科会でのレクチャー及び議論を踏まえた参加者の共通の問題意識は、おそらく、学術コミュニケーションが、円滑に、確実に、また、効率的に行われるための作業のコストは、だれが、どのように負担すべきなのか、ということだっただろう。

質の高い学術情報のコミュニケーションが安定的かつ効率的に行われるためには、研究者が書いた論文を評価し、質を更に高め、また、利用者にアクセスを確実に提供する作業が必要である。これらは学術コミュニケーション上の商品としての学術論文に価値を付加するための作業であり、それにはコストがかかる。これらの膨大な、また、その多くは高度に学術的な作業を組織し実行しているのは、いうまでもなく出版社であり、このことから、これらのコストは、伝統的に、まずは出版社が負担し、販売を通じて利用者に負担を転嫁するという形で処理されてきた。ところが、インターネット時代になって、一方で利用者に提供する際の複製と配送のコストがほぼゼロになり、他方では学術雑誌の価格が高騰する中で、それに対する反発から、だれでも無料で利用できるいわゆるオープンアクセスの論文やそれらを提供するサイトが生まれ急増することになった。

オープンアクセスの考え方は、従来、学術情報流通のコストが商品の購入者である利用者に負担されてきたのに対し、著者の側がそのコストを負担することによって利用者は経済的負担なしで論文を利用できるようにしようというものである。著者の所属する機関や図書館が機関リポジトリ等の運営という形で負担する方法（グリーンモデル）、著者が論文掲載料という形で負担する方法（ゴールドモデル）などがある。これらは、学術情報の流通、特に質の保証された論文の安定的な流通は、利用者だけでなく、著者側にとっても

必要不可欠であり、実際に多くの著者が、質の高い学術雑誌に自分の論文を掲載するためにはかなりのコストを支払ってもよい、と考えることなどに依っている。しかし、一方で、この方法は、価値の高い論文を選抜し最終的な商品の質を保証するという、今まで出版社が担ってきた機能の責任主体をあいまいにしその働きを弱めてしまう、という可能性を含んでいる。

また、これは私の感想だが、想定するコミュニケーションの範囲も気になる。「学術コミュニケーション」は、通常、そのトピックについて深い知識を備えた「学術的な人々」を対象に行われている。つまり、主に、大学、大学図書館、研究機関、研究者などの間のコミュニケーションである。しかし、いわゆる「知識社会」の中で、今日、地域の人々が日々の暮らしの中で適切な判断のために必要とする知識や情報の量は、以前よりはるかに大きくなっている。最新の科学的知見が生活や仕事の中に入ってくるスピードも速い。それらを受けて、現在では、公共図書館も、問題解決、課題解決のための知識・情報提供サービスを強めているところである。

今後の学術情報のコミュニケーションを考えると、学術の世界の外側とのコミュニケーションを含めてどう組織していくか、公共図書館はそれにどうかかわるのか、それを担保するための費用負担はどうしていくのがいいか。考えなければならないことは多い。

(戸田あきら／未来の図書館研究所)

第4分科会 大学図書館史

テーマ：大学図書館問題研究会の歴史を見る
Part7

担当者：加藤晃一、小山荘太郎

参加者数：9名

司会者：小山荘太郎

報告者・報告タイトル：

小山荘太郎（横浜国立大学附属図書館）

「大学図書館問題研究会の歴史を見るPart7
2011年～2023年の大図研」

配布資料：

- ・大学図書館研究会の歴史を見るPart7
- ・全国大会における分科会の一覧
- ・支部・地域グループ・研究グループ一覧
- ・大学図書館問題研究会・大学図書館研究会略年表
- ・全国大学一覧

今回の大学図書館史分科会は、大図研創立50周年を契機とした連続企画として、昨年につき1970年に成立した大学図書館問題研究会の歴史を主題とする。今回は1997年から2023年現在までが取り上げられた。大図研と大学図書館界の歩みについて、同時代史としての参加者個人の経験も共有しつつ、会報『大学の図書館』を主な史料として振り返ることとして、大学図書館史に関心を有する方やこれまでの歴史から現在を捉え直したい方などの参加を期待しており、大学図書館史を学び合う機会とするという趣旨であった。

まずは、「全国大学一覧（平成27年版）」が紹介された。例えば、会場となった大阪大学と、昭和24年開学の大阪外国語大学との関係性を読み取ることができる。大学の歴史を追う必須資料である。

大学図書館研究会を見るPart7では2017年から現在までということで、この分科会も第7部で役を暫く終えることになりそうだ。Part1-3が1970年-1989年で、ようやく現在へとたどり着いた感がある。ちょうど、この時期は、筆者が実行委員長を担っていた時期でもあり、懐かしい思い出を振り返ってみた。

会報の特集を見ると、2017年「学術リポジトリ連合（DRF）解散」2020年「NACSIS-CAT/IRのこれまでとこれから」2022年「研究データ管理」等が並び、時代を感じる。

本年全国大会としては、2020年全国大会をオンライン形式で開催、2021年名称を大

学図書館研究会に変更、会報の電子化（エンバゴ1年）、2022年第54回全国大会をオンラインで開催と、オンラインでの活動広く展開されている。

全国大会のオンライン開催分科会は、2020年、2021年、2022年共通で、利用者支援、出版・流通、資料保存、学術基盤整備、大学図書館史、図書館経営、キャリア形成、図書館建築・デザイン、の8分科会であったが、3年ぶりのオンサイト開催となった2023年大阪大会は、図書館経営と図書館建築・デザインが削減され6分科会へスリム化された。全参加者数から考慮すると、6分科会体制はちょうどよかったように思う。大学図書館史分科会の課題で一つ感じたのが、紙の資料が大量にある分科会だと、どうしてもその上で議論がおこるので、視覚障害者への配慮を事前に検討しておいた方がいいかもしれない。

最後に、この時代は、やはり新型コロナウイルス感染症の拡大への対応から、オンラインでの全国大会となり、厳しい思いをしたことを記憶している。この時代のノウハウが今後のハイブリッド開催にも繋がるだろう。また、オープンアクセス、研究データ管理等現代ならではの話題もみることができる。

次回、大学図書館史分科会は、また5年後あたりに、Part8が開催されるだろう。楽しみにして、今を生きていきましょう。

最後に、1977年入会兵庫支部の水田健介氏による大図研会員のメリットとして、1.「情報が手に入る」、2.「研究の場となる」、3.「大学図書館員としての満足が得られる」の3点が紹介された（同氏「大図研会員のメリット」『大図研15年の歩み』大学図書館問題研究会兵庫支部、1997、31頁）。

（山下大輔／EBSCO Information Services）

第5分科会 利用者支援

テーマ：所属機関を超えた利用者支援

～図書館に「市民科学」を応用した

事例について～

担当者：下山朋幸、徳田恵里、小林泰名

参加者数：26名

司会者：下山朋幸

報告者・報告タイトル：

小陳左和子（大阪大学附属図書館）

「saveMLAKというコミュニティにおける
国公立大学図書館のCOVID-19対応調査」

きたむらきよこ（ししょまろはん）

「ししょまろはん「没年調査ソン」の取り
組み—みんなで一緒に、ナイスソン!—」

配布資料：事後にメールにて配布・共有

1. はじめに

市民科学（シチズン・サイエンス）とは、一般市民を含めた、専門家ではないアマチュアの人々が、データ収集作業等の科学活動に積極的に参加する活動のことである。例としては、Wikipediaタウン、みんなで翻刻、全国公共図書館開館調査saveMLAK、没年調査ソン等がある。

本分科会では、様々な機関や立場の人が集まり、二名の事例報告と、実際に企画を考えるグループワークが行われた。

2. 事例報告①「saveMLAKというコミュニティにおける国公立大学図書館のCOVID-19対応調査」

発表者：小陳左和子氏（大阪大学附属図書館）

saveMLAKは、2011年の東日本大震災直後に発足した、有志が自発的に活動する、任意団体であり、活動例としては、災害時の各館の被害情報の共同編集、情報収集、支援の必要性の検討・調査が挙げられる。

小陳氏が国公立大学図書館のCOVID-19対応調査を始めたのは、コロナ禍において、当時勤務していた東北大学附属図書館の開館方針を検討するため、他大学の状況を知ろうとしたのがきっかけとのこと。収集した情報の公開先には複数の候補があったが、柔軟かつ

随時の更新ができるsaveMLAKのwebページを選んだ。調査は5人のメンバーで行われるが、ダブルチェックや、簡単なマニュアルも用意していたりと、有志の活動でありながらも、業務のように、ノウハウが蓄積されている印象を受けた。

3. 事例報告②「ししょまろはん「没年調査ソン」の取り組み—みんなと一緒に、ナイスソン!—」

発表者：きたむらきよこ氏

ししょまろはんは、京都府立図書館で働く図書館司書によって結成された、自主学習グループ。いくつかの活動のうち、今回は、没年調査ソンが紹介された。

没年調査ソンは、国立国会図書館デジタルコレクション掲載資料のうち、没年不詳の著作者の没年を調べる活動である。イントロダクション・レクチャーで講義や調べ方を説明、調査タイムで図書館資料やデータベースを使って調査、最後に成果発表を行う。調査タイムでは、情報が見つかったら「ナイスソン!」と声をかけあうことになっており、この声かけがあることで、互いのモチベーションを上げて作業が円滑に進んでいく印象を受けた。また、「没年が確定すれば、著作権の保護期間がわかり、期間満了でWebで公開できることもある」「文化共有のためのワークショップである」「人類、文化の未来に大きく役立つ」といった点が強く印象に残った。

没年調査ソンを始めたいならば、「ししょまろはんの許可は不要（報告してもらえとちょっと嬉しい）」とのこと。まずは、数人単位で「できることから、やってみる意欲」が大事である。

4. グループワーク

4つのグループに分かれて、「企画の名称」「開催方法」「企画の概要」「作業手順」等を考え、代表者が発表を行った。「阪神淡路大

震災直後の写真の、位置情報を特定する」「災害時に作られた石碑の碑文を、郷土資料等を利用して判読する」「同じテーマの調査を大学図書館と公共図書館で同時に行い、それぞれの強味を知る」「患者に対して安心できるコンテンツを提供するため、大学から公共図書館へ専門家を呼ぶ」、というように、それぞれ興味深い企画ばかりだった。

(六車彩都子／大阪大学)

第6分科会 学術情報基盤

テーマ：データクレンジングのはじめ方

担当者：田辺浩介、柿原友紀

参加者数：14名

司会者：田辺浩介

報告者・報告タイトル：

前田朗（東京大学情報システム部）

「大学図書館員のためのデータクレンジングのはじめ方」

配布資料：

- ・「大学図書館員のためのデータクレンジングのはじめ方」
- ・実習用資料：「OpenRefineの使い方」

プログラムは下記の通りであった。

14:10-14:40 講義「大学図書館員のためのデータクレンジングのはじめ方」

14:50-15:50 実習「OpenRefineの使い方」(1)

16:00-17:00 実習「OpenRefineの使い方」(2)

前田朗氏（以下、講師という）の講義では「データクレンジング」の定義・必要性について、特に大学図書館員としては、「メタデータクレンジング」スキルの必要性を説かれた。

資料の目録業務は分業で行うことが多いため、いくらルールを決めていても表記の揺れや目に見えない半角スペースの誤入力、全角・半角の入力ミス、エクセルの（余計なお世話）な機能による入力ミス、類似した漢字の誤入力、決められたルールに合わない入力ミス等、

個別の入力画面では発見しにくいミスも多数発生してしまう。また、コンピューターによる処理を目的としたデータは人間の目視では入力ミスを見逃しやすい。XML やJSON等の半構造データは表形式にするだけでも表記の揺れや入力ミスの発見がしやすくなる。そのためツールとして、今回は OpenRefine の使用方法を学んだ。

なお、OpenRefine 以外に講師より紹介されたツールとして ChatGPT があったが、使い方によっては表記の揺れ等はチェックできそうとのことである。

「OpenRefine の使い方」(1) では <https://openrefine.org/> から OpenRefine を入手し、インストール。その後、国立国会図書館のデジタルアーカイブのメタデータをサンプルとして、OpenRefine へのデータの読み込み、パースオプションの指定、プロジェクトの作成、表の表示、カラムの操作、カラムの並び替え・削除、ファセット、クラスタリング、文字列フィルタ、ソート、星と旗でマーキング、自動セーブとやり直し、外部ファイル出力、外部データとの照合等を講師の指示に従って実習した。

OpenRefine へは複数のファイルを選択して読み込むことができる。また外部出力では複数行の原因のカラムを「セル編集」「多値のセルを結合」で1行にまとめることができる等、業務での効率が上がりそうな機能を確認した。また、講師の経験によるノウハウ、例えば初期値で使うより、使用可能メモリを増やすこと（「openrefine.l4j.ini」のパラメータを3000M）でより快適に使用することができる等、独習していたのでは知りえない情報を得ることができた。

「OpenRefine の使い方」(2) では各自が持ち寄った書誌データ等を使って、受講者それぞれの目的に応じた使用方法を講師に相談しながら実習を行った。

Slack からエクスポートしたデータを加工

することにより、投稿された情報の整理に利用できそうであることを確認した。また、JAIROCloud が WEKO2 から WEKO3 にリプレイスされたことにより、データ欠如や入力ミスのため、IRDB のハーベスト時のエラーやワーニングが多発したが、この対策にも使えそうであることを確認した。なお残念なことに、MARC21 レコードは OpenRefine に取り込むことができるが、NACSIS-CAT の CATP レコードは取り込めないとのことである。

PC スペックが低い場合の OpenRefine の動作について質問が出された。筆者の PC は6年以上前に購入したものであるが、取り込むデータ量に注意すれば、ほとんど問題なく使用することができる。メタデータ以外も公的機関が出している統計等、そのままではエクセルで使いにくいデータの加工にも利用できそうである。

OpenRefine は比較的使いやすいツールであると思うが、PC へのインストールが必要なため、躊躇していた。今回専門的知識と経験をお持ちの講師により手ほどきを受け、利用するきっかけを得ることができた。担当してくださった皆様に感謝申し上げる。

(加川みどり) / 兵庫地域グループ・

学術基盤研究グループ)

シンポジウム

「大学図書館は生成系AIの夢を見るか？」

9月25日（月） 9:30～12:00

山中 司（立命館大学生命科学部教授）

吉本 龍司（株式会社カーリル代表取締役）

（要旨）

1. 山中司氏 講演

現状において日本の学生はあまり生成AIを使用していない。実際、某企業が社内環境にChatGPTを構築したが、その利用率は5%程度であり、あまり有効に活用されていない。これと対照に米国NY市において、当初は公教育におけるChatGPTの禁止が決定されたが、直後にその利用が解禁された。言語教育との関係においては、生成AIが大規模言語モデルによって学習した知識や、それによって獲得したNative Intuition（母語話者の直感）などの語学スキルは、第二言語として外国語を学ぶ人間には太刀打ちできない。英語を必修にするから英語ができない学生が出るのであって、英語も諸外国語と同様選択式にしたほうがいい。英語学習においても、生成AIはCEFRを指示すればその難易度で問題を生成してくれたり、その回答の正誤において適宜出題のレベルを調整させたりすることもできるため、生徒・学生は生成AIの出題する問題に回答し、教師は生徒・学生がどのように生成AIに出題させ、どのように回答したかをチェックするというような形も考えられるのではないかと。

2. 吉本龍司氏 講演

ChatGPTに対する米国図書館コミュニティの反応として、ChatGPTも結局Googleと同様に図書館員の地位を大きく揺るがすものではないだろう、というものがあつた。実際ChatGPTを活用することで図書館をより便利に利用できるのではないかと。実際に

ChatGPTに大学図書館員の役割をするよう指示し、蔵書検索質問をすると、完全ではないものの一定の精度の回答が返ってくる。また、覚え違いのようなタイトルも出力してくれる。現在は、カーリルが開発している学校図書館向けの蔵書検索システムにAPIを利用してChatGPTを連携させ、AIチャットによる蔵書検索補助システムを構築している。これは、あるキーワードを入力すると関連するキーワードや背景情報を説明してくれるシステムで、プログラム内でChatGPTに指示を行うことで、検索語と類似のキーワードを出力したうえで、自館で検索結果の出力されるキーワードのみを出力するものである。現状、感情に基づく検索（e.g.おもしろい本）やメタデータに入力していない情報に基づいて検索することは当然できていない。今後、図書館がメタデータをAPIで公開することにより、AIと図書館の一層の協働が可能になり、新たな可能性を生み出せるであろう。

3. シンポジウム

シンポジウムは基本的に会場からの質問に回答するかたちで進められた。以下箇条書きで質問と回答を列挙する。

Q. 現状AIは専門用語の翻訳の精度が低いのではないかと？

A. 現状としては確かに業界独自の特殊な翻訳用語には対応できていないが、これは将来的に専門企業の参入によって徐々に改善されていくのではないかと。

Q. 学生に生成AIの使い方を伝えるうえで、問いの立て方をどのように指導したらいいか？

A1. 確かにコンピュータに聞き取られやすい発音や生成AIが回答しやすい質問文の作り方はあるが、それには慣れるしかないだろう。

A2. 現在ChatGPTは約3か月ごとに更新されており、実際に業務で使用する上でも3か月に一度担当者が代わるようなイメージを受けているため、都度最適化な問いを研究している。

Q. 英語教育の必要性についてどのような議論があるか？

A. 英語を必修でなくすことには当然英語教師からの反対はある。しかし今後それが変化する可能性はある。同様に、プログラミングに関しても結果の可否よりコード設計等を評価する方向に進むのではないか。

Q. 生成AIが論文検索できるようになることで何ができるかについて、具体的なアイデアはあるか？

A. OA論文はAIの学習源であり、これによって専門用語の問題も解決できるであろう。また抄録の自動生成や、ある論文に反対意見の論文の悉皆調査をすることなども考えられる。

まとめ

データをオープンにしないことは自分で自分の首を絞めるようなものである。図書館は、ChatGPTがある世界に自身をどう位置付けるか考えていく必要がある。

(有馬良一／神戸大学附属図書館)

ウェルカムガイダンス

日時：9月23日（土・祝） 14:00～14:15

参加者数：10名

内容：

1日目の9月23日（土・祝）14:00～14:15に全国大会初参加者を対象にしたウェルカムガイダンスを実施した。今大会では対面のみで行い、オンラインでは実施しなかった。

まず、入会案内を基に「地域グループ」や「研究グループ」といったグループ活動、会員特典、入会方法と年会費等の大学図書館研究会の概要について説明を行いこの機会の入会の検討を呼び掛けた。

次に今大会について会場案内と予稿集を使って案内した。大会のスケジュールと各会場の場所、キャンパス周辺のランチ事情等について説明したが、サブ会場である全学教育推進機構 スチューデント・コモンズが2日目の一部の分科会と3日目のシンポジウムの会場となることは特に強調した。

最後に事務連絡を行った。大会期間中の事務局の場所を伝えるとともに、不明点があれば事務局以外でも黄色の名札をつけているスタッフにお声がけいただくよう案内した。また、会場内の飲食のルールとして1日目の会場は飲食禁止であることと、2日目は休憩・昼食会場を用意していることを連絡した。アンケートのお願いも行い、事務連絡の用紙に掲載しているQRコードもしくはURLから回答していただくよう呼びかけた。質問を受け付ける時間も用意したが、今回のウェルカムガイダンスでは質問はなかった。

(山上朋宏／奈良女子大学学術情報センター)

自主企画

大阪大学総合図書館の特別見学会

日時：9月25日（月） 13:40～14:20

参加者数：8名

内容：

3日目午後に「大阪大学総合図書館の特別見学会」が開催されました。同館の書庫や貴重書室の温湿度管理について、大阪大学附属図書館 図書館サービス課・特殊資料担当の久保山健氏から詳細な解説がありました。

交流会

日時：9月23日（土・祝） 17:00～18:00

参加者数：約40名

内容：

全国大会1日目の最後のプログラムとして、交流会が、大阪大学会館ホールにて、対面で、飲食なしで開催されました。

山口大会実行委員長の司会のもと、各グループの紹介、大阪大学キャンパスの紹介があり、その後、会場内で自由に歓談する時間がもたれました。昨年のオンライン開催とは異なり、1対1で対話をしたり、会場内を歩き回って久しぶりに会う人と話したり、共通の話題を持つグループで集まったりするなど、対面開催による交流を深めることができました。

第54回全国大会 協賛企業・団体一覧

第54回全国大会開催にあたり、以下の企業・団体様からご協賛をいただきました（50音順）。ここに深く感謝申し上げます。

EBSCO Information Services Japan 株式会社
 NPO 医学中央雑誌刊行会
 株式会社カーリル
 株式会社カルチャー・ジャパン
 株式会社紀伊國屋書店
 株式会社規文堂
 株式会社サンメディア
 株式会社シー・エム・エス
 株式会社樹村房

株式会社ソフエル
 株式会社ネットアドバンス
 日外アソシエーツ株式会社
 日本事務器株式会社
 日本ファイリング株式会社
 有限会社藤井洋書
 丸善雄松堂株式会社
 株式会社メタ・インフォ



図書館Webサイト構築

- 図書館システムを代表とするメタデータを活用した高度検索システムの開発が得意です。
- 教育機関や研究所様のウェブサイト制作実績も多数あります。（36サイト以上）

デジタル・アーカイブシステム開発

- Drupal で柔軟なメタデータの構築、および JPCOAR に対応したメタデータ定義も可能です。
- 国内の著名大学の IIF 対応システム構築開発の実績があります。
- 複数コレクションを作成し、コレクションごとに検索項目を独自に設定することも可能です。またコレクションはユーザー自身で追加もできます。

MetalInfo 株式会社メタ・インフォ
 (本社) 〒105-0001 東京都港区虎ノ門4丁目1-11
 (岩国オフィス) 〒742-0324 山口県岩国市玖戸町駅前 797-28
 メールアドレス sales@meta-info.co.jp
 ウェブサイト URL <https://www.meta-info.co.jp/>



Feature 01
 きめ細かなデータ管理と業務効率の追求を両立した業務機能

Feature 02
 誰でも直感的に操作可能な OPAC で図書館の情報発信力アップ

Feature 03
 無償バージョンアップで常に最新のネオシリウスを

図書館専任SEによるサポート
 24時間 365日のクラウド監視
 高品質かつ安定した図書館サービスを提供します

学習支援のための文献レビューアプリ

BOOK MARRY
 学内で参考文献や本のレビューを共有し、それぞれの学生の学びに役立てることができるアプリ。

学習支援サービスとして
 レポートのための参考文献探しを効率化し行う

読書推進サービスとして
 あなたの人生に影響を与えるような本に出会う

日本事務器株式会社 事業戦略本部 図書館 交款ソリューション担当

ExLibris Summon で文献収集

Ex Libris 社のウェブスケールディスカバリーサービス Summon は、図書館が提供する様々な種類の学術資料を一つの検索窓からまとめて検索することができます。

Summon についても詳しく 

RefWorks で論文作成

RefWorks は Ex Libris 社の提供する文献管理ツールです。Google Scholar や PubMed などのデータベースやディスカバリーサービスで見つけた文献情報を、クラウド上で管理することができます。取込んだ文献情報を使って論文の参考文献リストを指定した形式で簡単に出力することもできます。

RefWorks についても詳しく 

お見積りやトライアルのご相談は...

SUNMEDIA 株式会社サンメディア e-Port カンパニー

e-mail : e-port@sunmedia.co.jp
 東京都中野区本町 3-10-3 PORT ビル Tel : 03-3299-1575

大学図書館研究会 第54回全国大会 会員総会資料

目 次

【第1号議案】第53期(2022/2023年度)活動報告

1. 活動日誌
2. 地域グループ報告
3. 研究グループ報告
4. 常任委員会等

【第2号議案】第53期(2022/2023年度)決算報告・会計監査報告

1. 2022/2023年度一般財政決算報告
2. 2022/2023年度大会基金決算報告
3. 2022/2023年度出版財政決算報告
4. 2022/2023年度五十周年事業基金報告
5. 2022/2023年度会計監査報告

【第3号議案】第54期(2023/2024年度)活動計画案

【第4号議案】第54期(2023/2024年度)予算案

1. 2023/2024年度一般財政予算案
2. 2023/2024年度大会基金予算案
3. 2023/2024年度出版財政予算案
4. 2023/2024年度五十周年事業基金予算案

※この資料では、以下の省略形を用いる。

正式名称	省略形
大学図書館研究会	大図研
大学図書館研究会報『大学の図書館』	会報
大学図書館研究会誌	会誌
ワーキンググループ	WG

※第5号議案「第54期(2023/2024年度)役員案」は、会員総会当日に配布もしくは投影する。

【第1号議案】

第53期（2022/2023年度）活動報告

全国委員会、常任委員会、会計監査は、特記以外全てオンライン（Zoom）で実施した。

1. 活動日誌

[2022年]

7月8日（金）

会報2022年6月号発送

7月23日（土）

会計監査

8月4日（木）

会報2022年7月号発送

8月7日（日）

2021/2022年度 第9回常任委員会

9月5日（月）

会報2022年8月号発送

9月17日（土）

2021/2022年度 第6回全国委員会

9月17日（土）-9月19日（月祝）

第53回全国大会

9月17日（土）

第1回全国委員会

10月14日（金）

会報2022年9月号発送

10月16日（日）-22日（土）

第1回常任委員会

メール審議

11月27日（日）

第2回常任委員会

12月4日（日）

会報2022年10月号・11月号発送

12月11日（日）

第3回常任委員会

[2023年]

1月22日（日）

第4回常任委員会

1月26日（木）

会報2022年12月号発送

1月29日（日）-2月5日（日）

第2回全国委員会

メール審議

2月11日（土祝）

会報2023年1月号発送

第5回常任委員会

3月5日（日）

第6回常任委員会

3月19日（日）

第3回全国委員会

3月27日（月）

会報2023年2月号発送

4月18日（火）

会報2023年3月号発送

4月15日（土）-23日（日）

第7回常任委員会

メール審議

4月24日（月）

会報2023年4月号発送

5月14日（日）

第8回常任委員会

6月8日（木）

会報2023年5月号発送

6月18日（日）

第9回常任委員会

2. 地域グループ報告

各項目の説明は以下のとおり。

- ① 2023年6月30日現在の会員数
- ② 運営体制
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
- ④ グループ報の発行
- ⑤ 最近の総会等の報告
- ⑥ その他、特記事項

2.1 北海道地域グループ

- ① 2023年6月30日現在の会員数 10名
- ② 運営体制
グループ長 磯本 善男 (放送大学)
全国委員 小林 泰名 (北海道大学)
会 計 磯本 善男 (放送大学)
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
名 称 2022/2023年度第1回定例会
日 時 2023年2月19日 (日) 9:00-10:15
会 場 オンライン (Zoom)
内 容 ● 新入会員紹介
● 今後の活動についてなど
参加者数 6名
- ④ グループ報の発行 なし
- ⑤ 最近の総会等の報告 なし
- ⑥ その他、特記事項 なし

2.2 千葉地域グループ

- ① 2023年6月30日現在の会員数 12名
- ② 運営体制
地域グループの長 鈴木 宏子
全 国 委 員 加藤 晃一 (千葉大学)
会 計 内山 光子
広 報 内山 光子
研 究 牛島 千穂 (東京藝術大
学)
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
名 称 関東地域グループ合同例会
日 時 2023年2月19日 (日)
13:30-15:00
会 場 オンライン (Zoom)
内 容 オンライン座談会「管理職×若
手～2050年の大学図書館はど
うなってる?～」
参加者数 56名
備 考 千葉・東京地域グループ共催
名 称 図書館見学会
日 時 2023年5月27日 (土) 13:00-
18:00

- 会 場 東京藝術大学附属図書館/国立
国会図書館国際子ども図書館
参加者数 6名
- ④ グループ報の発行 なし
 - ⑤ 最近の総会等の報告
名 称 千葉地域グループ総会
日 時 2023年2月23日 (木祝)
10:35-11:45
会 場 オンライン
参加者数 6名
内 容 ● 会計報告 (2017年7月～
2023年2月)
● 今年度の活動内容について
● 今後の企画について
● 地域グループ会報の発行に
ついて
● 大学図書館研究会の最近の
活動について
 - ⑥ その他、特記事項 なし

2.3 東京地域グループ

- ① 2023年6月30日現在の会員数 87名
- ② 運営体制
地域グループの長 安達 修介
全 国 委 員 下山 朋幸
運 営 委 員 小林 和実
下城 陽介
立原 ゆり
松原 恵
山口 友里子
山崎 圭
オブザーバ 青山 史絵
池田 隆平
上村 順一
高瀬 洋子
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
名 称 第1回情報交換会
日 時 2022年10月29日 (土)
15:00-16:00
会 場 オンライン (Zoom)

内 容 全国大会の参加報告
 参加者数 14名

名 称 第1回見学会
 日 時 2022年12月3日(土) 11:00-12:30
 会 場 オンライン (Zoom)
 話題提供 明治大学米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館
 内 容 館内の見学および概要説明
 参加者数 12名

名 称 関東地域グループ合同例会
 日 時 2023年2月19日(日) 13:30-15:00
 会 場 オンライン (Zoom)
 内 容 オンライン座談会「管理職×若手～2050年の大学図書館はどうなってる?～」
 参加者数 56名
 備 考 千葉・東京地域グループ共催

名 称 第1回東京地域グループ例会
 日 時 2023年6月11日(日) 10:30-12:00
 会 場 喫茶室ルノアール 新宿3丁目ビッグスビル店 貸会議室マイ・スペース7号室
 内 容 「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について(審議のまとめ)」を読んでもみる会
 参加者数 12名

④ グループ報の発行

回 数 4回
 巻 号 256号-259号
 発行月日 2022年11月-2023年6月

⑤ 最近の総会等の報告

名 称 東京地域グループ総会
 日 時 2022年8月7日(日) 10:30-11:30

会 場 武蔵野プレイス フォーラム A
 参加者数 14名
 内 容 ● 活動総括、2021/2022年度決算報告・会計監査報告
 ● 活動方針、2022/2023年度予算案、2022/2023年度地域グループ運営委員会及び会計監査人について
 ● 終了後、情報交換会を開催

⑥ その他、特記事項

会報『大学の図書館』2023年5月号の特集「大学図書館・図書館職員の研修～『学ぶ』と『育てる』の両面から捉える～」の企画編集を担当した。

2.4 東海地域グループ

① 2023年6月30日現在の会員数 20名

② 運営体制

地域グループ長 中島 慶子
 全 国 委 員 中川 恵理子
 事 務 局 前田 勝典
 財 政 中村 直美
 広 報 中村 直美

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告 なし

④ グループ報の発行 なし

⑤ 最近の総会等の報告

名 称 第54回東海地域グループ大会
 日 時 2022年8月27日(土) 14:00-17:00
 会 場 オンライン (Zoom)

内 容 ● 2021/2022年度総括・決算
 ● 2022/2023年度活動方針・予算・大学図書館研究会東海地域グループ役員について

参加者数 Zoom参加者(6名)、委任(8名)
 備 考 大会後、情報交換会を行った

⑥ その他、特記事項 なし

2.5 京都地域グループ

① 2023年6月30日現在の会員数 51名

② 運営体制

グループ代表 長坂 和茂
全国委員 山上 朋宏
運営担当 安東 正玄
内田 栞
坂本 拓
野間口 真裕
原 健治
山下 ユミ
若狭 あや

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告

名称 関西3地域グループ合同例会「図書館空間を演出する～学びをつなげる場所」

日時 2023年3月25日（土）
15:00-16:40

会場 オンライン（Zoom）
講師 尼川 ゆら氏（空間プロデューサー）

内容 空間プロデューサーの尼川ゆら氏を講師にお迎えし、講演とワークショップを行った。図書館と人をつなげるに当たり、「伝えたいことを伝わりやすく工夫する」ことが出来ていたか？来館者の目的が多様になっている現在において、図書館を使いたくなる気持ちへとつなげるにはどういう工夫が要るのかを再考できる機会となった。

参加者数 22名

備考 京都・大阪・兵庫地域グループ共催

④ グループ報の発行

回数 4回

巻号 348-351

発行月日 2022年8月7日-2023年6月1日

⑤ 最近の総会等の報告 なし

⑥ その他、特記事項 なし

2.6 大阪地域グループ

① 2023年6月30日現在の会員数 30名

② 運営体制

地域グループの長 小村 愛美
全国委員 吉田 弥生
事務局 伊賀 由紀子
会計 吉田 弥生
地域グループ委員 小山 莊太郎

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告

名称 11月例会「全国大会報告会」
日時 2022年11月12日（土）
14:00-17:00

会場 オンライン（Zoom）
内容 第53回全国大会について、各自が参加した分科会等の内容を報告し合った。

参加者数 8名

名称 2月例会「箕面市立船場図書館・大阪大学外国学図書館見学会」

日時 2023年2月11日（土）
14:00-16:30

会場 箕面市立船場図書館・大阪大学附属図書館外国学図書館
内容 箕面市立船場図書館・大阪大学附属図書館外国学図書館

参加者数 14名

名称 関西3地域グループ合同例会「図書館空間を演出する～学びをつなげる場所」

日時 2023年3月25日（土）
15:00-16:40

会場 オンライン（Zoom）
講師 尼川 ゆら氏（空間プロデューサー）

内容 空間プロデューサーの尼川ゆら氏を講師にお迎えし、講演と

ワークショップを行った。図書館と人をつなげるに当たり、「伝えたいことを伝わりやすく工夫する」ことが出来ていたか？来館者の目的が多様になっている現在において、図書館を使いたくなる気持ちへとつなげるにはどう工夫が要るのかを再考できる機会となった。

参加者数 22名

備考 京都・大阪・兵庫地域グループ
共催

④ グループ報の発行

回数 1回

巻号 No. 7

発行月日 2022年7月30日

⑤ 最近の総会等の報告

名称 第7回地域グループ総会

日時 2022年8月6日（土）
15:00-17:00

会場 オンライン（Zoom）

参加者数 6名（この他に委任状9名）

内容 ● 2021年度活動報告、決算報告・監査報告
● 2022年度役員案および活動方針案、予算案についての協議

⑥ その他、特記事項 なし

2.7 兵庫地域グループ

① 2023年6月30日現在の会員数 19名

② 運営体制

地域グループ長 森藤 恵子

地域グループ長補佐 六車 彩都子

全国委員 徳田 恵里

事務局 花崎 佳代子

財政部長 井上 俊子

編集部 有馬 良一

井上 昌彦

会計監査 杉原 奈美

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告

名称 円安問題に関する情報・意見交換会

日時 2022年8月15日（月）
18:00-19:30

会場 オンライン（Zoom）

内容 今年の急激な円安により予想される資料費高騰への各大学での対応について、情報・意見交換を行った。
終了後有志で、テーマを定めない情報交換会を1時間程度行った。

参加者数 8名

名称 読書討論会『ネット時代の図書館戦略』

日時 2022年9月11日（日）
15:00-16:30

会場 オンライン（Zoom）

内容 図書「ネット時代の図書館戦略」を用いて、読書討論会を行った。参加者がそれぞれ意見を述べたり疑問を感じた点を紹介したりして、他の参加者と意見交換を行った。
終了後有志で、テーマを定めない情報交換会を1時間程度行った。

参加者数 5名

名称 「図書館を考える～公共から大学へ 大学から公共へ」

日時 2023年2月18日（土）
15:00-16:35

会場 オンライン（Zoom）

講師 伊東 直登氏（松本大学松商短期大学部商学部教授）

内容 松本大学松商短期大学部商学部教授伊東直登氏を講師にお迎え

し、講演会を行った。「地域」と「連携」ということから、大学図書館を再考するきっかけとなった。

参加者数 20名

名 称 関西3地域グループ合同例会「図書館空間を演出する～学びをつなげる場所」

日 時 2023年3月25日(土)
15:00-16:40

会 場 オンライン (Zoom)
講 師 尼川 ゆら氏 (空間プロデューサー)

内 容 空間プロデューサーの尼川ゆら氏を講師にお迎えし、講演とワークショップを行った。図書館と人をつなげるに当たり、「伝えたいことを伝わりやすく工夫する」ことが出来ていたか? 来館者の目的が多様になっている現在において、図書館を使いたくなる気持ちへとつなげるにはどのような工夫が要るのかを再考できる機会となった。

参加者数 22名

備 考 京都・大阪・兵庫地域グループ共催

名 称 「『3訂 図書館と情報技術』の改訂作業を通して考えたこと」

日 時 2023年6月25日(日)
14:00-15:15

会 場 オンライン (Zoom)
講 師 徳田 恵里氏 (近畿大学短期大学部商経科 (司書課程) 非常勤講師)

内 容 図書館で活用される多様な情報技術について解説した教科書・参考書であり、このたび最新情

報を反映して改訂された『3訂 図書館と情報技術』(樹村房, 2023)の著者の一人である、徳田恵里氏を講師としてお迎えした。本書のご執筆を通じて感じられた「新しいICT機器・技術」や「デジタルアーカイブ」等に関する問題提起を徳田氏よりいただき、参加者の方も交えてディスカッションを行った。例会終了後、参加自由の情報交換会を行った。

参加者数 14名

名 称 不定期交流会

日 時 1 2022年10月12日(水)
21:00-21:35
2 2022年11月21日(月)
21:00-21:45
3 2023年1月16日(月)
20:30-21:50

会 場 オンライン (Zoom)
内 容 30分程度の時間で、日頃の業務や近況について自由に話し合ったり、意見交換を行ったりした。今後も不定期で開催予定。

参加者数 いずれも5名

- ④ グループ報の発行なし
- ⑤ 最近の総会等の報告

名 称 第44回地域グループ大会

日 時 2022年10月2日(日)
9:30-11:00

会 場 オンライン (Zoom)
内 容 決算・予算・役員人事・会報・グループの活動方針等について、検討を行った。終了後交流会を実施した。

参加者数 10名

- ⑥ その他、特記事項
兵庫地域グループMLにて情報交換、イベ

ント案内などを随時行った。

2.8 広島地域グループ

- ① 2023年6月30日現在の会員数20名
- ② 運営体制
- 地域グループの長 沖政 裕治 (広島大学)
- 全国委員 楫 幸子 (安田女子大学)
- 事務局長 沖政 裕治 (広島大学)
- 事務局員 山下 真佑美 (広島商船高等専門学校)
- 会計 山下 真佑美 (広島商船高等専門学校)
- 会計監査 津村 光洋 (広島大学)
- 編集長 石井 美絵 (広島文教大学)
- 編集委員 片山 智恵美 (広島都市学園大学)
- 北井 由香 (鳥根県立大学)
- 込山 祐佳里 (広島大学)
- 永友 恵 (広島大学)
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
- 名称 7月研究会
- 日時 2022年7月2日 (土)
14:15-16:15
- 会場 オンライン (Zoom)
- 内容 蔵書管理
- 参加者数 8名
- 名称 12月研究会
- 日時 2022年12月18日 (土)
10:00-12:00
- 会場 オンライン (Zoom)
- 内容 図書館職員の選書
- 参加者数 9名
- 名称 5月研究会
- 日時 2023年5月28日 (日)
10:00-12:00
- 会場 オンライン (Zoom)

内容 図書館システム (その1)

備考 4名

- ④ グループ報の発行
- 回数 3回
- 巻号 233号-235号
(電子版No. 44-46)
- 発行月日 2022年9月1日、
2022年11月15日、
2023年2月15日
- ⑤ 最近の総会等の報告
- 名称 広島地域グループ総会
- 日時 2022年7月2日 (土)
13:00-14:15
- 会場 オンライン (Zoom)
- 参加者 8名
- 内容 会計報告、活動報告、予算案、
役員選出、次期活動計画
- 備考 終了後、研究会を開催
- ⑥ その他、特記事項なし

2.9 九州地域グループ

- ① 2023年6月30日現在の会員数37名
- ② 運営体制
- 地域グループ長 柿原 友紀
- 全国委員 柿原 友紀
- 事務局 坂本 里栄
- 会計 坂本 里栄
川崎 陽奈
- 企画サポーター 小野 未来子
金子 芙弥
川崎 陽奈
山下 大輔
- 会報編集 平山 紀子
- 会計監査 西村 泰成
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
- 名称 10月例会
- 日時 2022年10月9日 (日)
13:00-15:10
- 会場 オンライン (Zoom)
- 内容 全国大会報告例会

備考	5名
名称	11月例会
日時	2022年11月13日(日) 13:00-15:55
会場	オンライン (Zoom)
内容	「研究データ管理」と機関リポ ジトリ
発表者	柿原 友紀、西蘭 由依、川崎 陽 奈
備考	17名
名称	1月例会
日時	2023年1月28日(土) 13:00-15:05
会場	オンライン (Zoom)
内容	フリートーク
備考	11名(うち非会員1名)
名称	2月例会
日時	2023年2月25日(土) 15:00-17:00
会場	オンライン (Zoom)
内容	フリートーク
備考	5名
名称	5月例会
日時	2023年5月27日(土) 15:00-17:00
会場	オンライン (Zoom)
内容	フリートーク
備考	7名
名称	6月例会
日時	2023年6月18日(日) 14:05-16:00
会場	博多駅周辺の貸会議室
内容	コロナ後の海外出張
発表者	坂本 里栄
備考	6名(例会前に5名でランチ会

	を開催)
④	グループ報の発行 なし
⑤	最近の総会等の報告
名称	2022・2023年度地域グループ 総会
日時	2022年7月30日(土) 13:00-16:15
会場	オンライン (Zoom)
内容	● 2021/2022年度 決算報告 / 活動報告 / 組織報告 ● 2022/2023年度 役員改選 / 活動方針・活動計画案 / 予算案 ● その他
参加者数	13名(この他に委任状18名)
名称	2022・2023年度地域グループ 臨時総会
日時	2022年12月3日(土) 19:00-19:30
会場	オンライン (Zoom)
内容	2022/2023年度九州地域グルー プ役員変更案について
参加者数	9名(この他に委任状21名)
⑥	その他、特記事項
	「大学の図書館」2023年7月号の特集編集 を担当した。

3. 研究グループ報告

各項目の説明は以下のとおり。

- ① 2023年6月30日現在の会員数
- ② 運営体制
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
- ④ グループ報の発行
- ⑤ 最近の総会等の報告
- ⑥ その他、特記事項

3.1 長期的研究グループ

3.1.1 学術基盤整備研究グループ

- ① 2023年6月30日現在の会員数 19名

② 運営体制

グループ長 野間口 真裕 (京都教育大学)
 全国委員 田辺 浩介 (物質・材料研究機構)

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告

名 称 データスキル勉強会
 日 時 2022年7月10日(日) -
 2023年6月25日(日)
 (およそ2週間に1回の頻度で開催)
 会 場 オンライン (Zoom)
 参加人数 毎回3-4名
 備 考 勉強会の題材は以下のとおり。

- Library Carpentry: The Unix Shell (<https://librarycarpentry.org/lc-shell/>)

④ グループ報の発行 なし

⑤ 最近の総会等の報告 なし

⑥ その他、特記事項

「大学の図書館」2023年4月号の特集「新NACSIS-CAT/ILLのデータ移行作業に伴うNACSIS-CAT/ILLシステム停止、その時図書館は」の編集を担当した。

3.2 萌芽的研究グループ

今年度、萌芽的研究グループは設置されなかった。

4. 常任委員会等

常任委員会では、常設の5委員会(全国大会、研究企画、会報編集、会誌編集、広報)、五十周年記念事業関連の1委員会(記念出版物編集)、1WG(全国大会)、および事務局において会務を行い、各課題に取り組んだ。

委員会およびWGの長は常任委員が務め、主として常任委員で構成される。また、会務をサポートする運営サポート会員を会員から公募することによって、運営の強化を図っている。

常任委員会の構成、各委員会、各WGおよび事務局の活動報告は以下のとおりである。

3.1 常任委員会等の体制

3.1.1 常任委員会

会長(全国委員会委員長): 呑海沙織
 副会長: 赤澤久弥
 全国大会委員会: 赤澤、上村、中筋知恵+、
 研究企画委員会: 小山莊太郎、有馬良一、呑海、運営サポート会員
 会報編集委員会: 上村、北川正路、和知剛、
 北海道地域グループ*、東京地域グループ*、
 京都地域グループ*、大阪地域グループ*、
 兵庫地域グループ*、九州地域グループ*、
 学術整備基盤研究グループ*
 会誌編集委員会: 北川、赤澤、有馬、和知、
 運営サポート会員
 広報委員会: 中筋+、運営サポート会員

3.1.2 五十周年記念事業関連委員会

記念出版物編集委員会: 北川、上村、小山、
 呑海、運営サポート会員

3.1.3 WG

全国大会WG: 赤澤、上村

3.1.4 事務局

事務局長: 上村
 出版担当: 上村、市村省二*、清水滋文*、瀧
 桂子*、仲尾正司*、森永瑞穂*
 会計担当: 上村、澤木恵+
 会費徴収担当: 渡邊伸彦+、赤澤、澤木+
 組織担当: 上村、青山史絵+
 ML担当: 磯本善男+

注1) 先頭は、その組織の長

注2) 初出のみ氏名を記載。初出以外は氏
 のみ記載

注3) +は、特定常任委員

注4) *は、運営サポート会員

4. 常任委員会等の活動報告

4.1 常任委員会

4.1.1 全国大会委員会

全国大会委員会は、毎年開催する全国大会の企画・運営を担当している。

2022/2023年度の全国大会は、第53回全国大会として、去る2022年9月17日（土）から9月19日（月・祝）の3日間、前回に引き続き、オンライン形式で開催した。会員から募った計13名からなる全国実行委員会によって、従来のオンサイト大会同様のプログラムで実施し、合計137名の出席者があった。会員総会のほか、記念講演、研究発表、8つの課題別分科会、シンポジウムおよび交流会等を実施し、成功裏に終了することができた。また、16社からの企業協賛を得た。

4.1.2 研究企画委員会

研究企画委員会は、全国大会以外の研究活動を担当している。

① 大図研オープンカレッジ (DOC)

大図研オープンカレッジ（以下、「DOC」という）は大図研の広報および新入会員の獲得を目的として、参加対象を会員に限定しない方針で行っている。第31回（2022/2023年度）のDOCは、日本図書館研究会大学図書館研究グループとの共催で「高校情報教育から考える情報リテラシー教育」というテーマで、昨年引き続きオンライン形式（Zoom）により、2023年5月20日（土）10時30分から12時00分まで開催した。講師は小野永貴氏（筑波大学図書館情報メディア系助教）であった。会員・非会員を含め全国から参加があり、参加者数は49名であった。なお、イベント管理および参加費集金について、Peatixを使用した。

② 研究グループ

前年度に引き続き「学術基盤整備研究グループ」（長期的）が活動を行った。メンバーは各地の会員から構成され、ウェブ上での情

報共有や意見交換が主な活動である。2022年9月開催の第53回全国大会（オンライン）の第5分科会（学術基盤整備）を担当した。なお今年度は、萌芽的研究グループについては応募がなかったため、設置されなかった。

③ オンライン交流会

オンラインでの会員総会の円滑な進行および行動制限下における会員交流を目的に、オンライン交流会を開催してきたが、一定の役割は果たせたと考えたため、オンライン交流会は開催しなかった。

4.1.3 会報編集委員会

月刊誌として12回の発行を行った。

2022年7月号以降は以下の特集のもと刊行した。

- | | |
|------|--|
| 7月号 | これから管理職を目指す人に伝えたいこと（担当：九州地域グループ） |
| 8月号 | デジタルアーカイブの動向と取り組み（担当：兵庫地域グループ） |
| 9月号 | 利用者・職員の声の聞き方/届け方（担当：京都地域グループ） |
| 10月号 | 全国大会フラッシュ号（担当：会報編集委員会） |
| 11月号 | 研究データ管理（担当：大阪地域グループ） |
| 12月号 | 大学図書館研究会第53回全国大会記録[全国大会記録号]（担当：会報編集委員会） |
| 1月号 | 大学図書館研究会とわたくし（担当：会報編集委員会） |
| 2月号 | 足跡をたどる（担当：北海道地域グループ） |
| 3月号 | 図書館員最近のTips：最近リリース/リニューアルされた図書館員へオススメのアイテムの利用法（担当：会報編集委員会） |

- 4月号 新NACSIS-CAT/ILLのデータ移行作業に伴うNACSIS-CAT/ILLシステム停止、その時図書館は(担当:学術基盤整備研究グループ)
- 5月号 大学図書館・図書館職員の研修～「学ぶ」と「育てる」の両面から捉える～(担当:東京地域グループ)
- 6月号 大学図書館研究会第54回全国大会開催要綱[全国大会議案書号]
(担当:会報編集委員会)

EBSCOへの会報データ提供は、引き続き扱い保留。

4.1.4 会誌編集委員会

会誌は、年1回、8月の発行とすることが投稿規程にて規定されており、第48号(2023年8月)では、8月刊行のサイクルを維持できる編集スケジュールを設定して、そのスケジュールを遵守するように努めた。また、第48号からはオープンアクセスとなるため、オープンアクセスに対応した各種公開ルールについて委員会内で意見交換をしたが、ルールの策定は継続課題となった。

また、論文投稿の受付再開に向け、第46号、第47号での査読経験に基づき、査読過程をできるだけ滞りなく進めるための方法について委員会内で検討を行った。査読体制の改善、論文原稿の編集スケジュールの整備は継続課題となった。

4.1.5 広報委員会

広報委員会は、ウェブとSNSによる広報を担当した。

- 大図研ウェブ(<https://www.daitoken.com/>)による情報発信を引き続き行った。大図研ウェブでは、大図研のイベント案内や会報の目次情報と記事データ

ベース、全国委員会や常任委員会、研究活動の記録、刊行物案内等を掲載した。

- 会員向けの出版物のデジタル頒布のため、発行の都度、Web上に会報PDFを掲載するとともに、会員への掲載通知を行った。
- 会報PDFの1年間のエンバゴ終了後、オープンアクセスとした。
- TwitterやFacebookなどのSNSにて大図研の諸活動の広報を行った。

4.2 五十周年記念事業関連委員会

4.2.1 記念出版物編集委員会

会員の皆様から編集・発行作業の遅れに関する問合せを受けているところ、発行に向けた明確な方向性を示すことができず、今年度内の発行に至らなかった。

記念出版物の内容は、「記録資料」の部分と「大図研の活動の振り返り、寄稿」の部分から構成される。「記録資料」の部分は、昨年度までに各地域グループにて作成いただいた活動経緯・役員変遷の記録資料(一部未作成)の取りまとめに加え、今年度は、大図研全体の動きに関する原稿の作成を進めた(略年表、組織の変遷、全国大会一覧)。「記録資料」のうち出版物目次一覧作成は着手できなかった。

「大図研の活動の振り返り、寄稿」の部分に関して、「振り返り」については、委員長の時代区分で項目立てをして、当初は、各時代の活動に直接関与された会員に執筆を依頼する予定であったが、執筆依頼はせず、全国大会の課題別分科会「大学図書館史」にて報告された資料に基づいて編集委員会にて原稿を作成することを検討。「寄稿」の依頼も未着であり、「振り返り」の原稿作成と並行して対応することとした。

4.3 WG

4.3.1 全国大会WG

全国大会WGは、①全国大会の円滑な運営のための実行委員会方式の安定的な継続、②全国大会運営マニュアルの整備の2つの目標に基づき活動を行ってきた。2022/2023年度も、実行委員会方式に拠り、全国大会委員会及び全国大会実行委員会と連携して活動を行った。

オンライン形式で実施した第51回～第53回大会、オンサイト（一部ハイブリッド）形式で実施する第54回大会の運営ノウハウを蓄積するとともに、運営マニュアル化を企図して、大会実行委員会で導入したbacklogに、第52回～第54回大会のドキュメントを蓄積している。引き続き、マニュアルとして整備を継続するとともに、大会運営の方針など概要に関するドキュメントをまとめていく。なお、第44回大会以来の実行委員会方式による運営も定着した。

以上を踏まえ、本WG設置は、2022/2023年度をもって解消し、全国大会運営マニュアルの整備と運用は、全国大会委員会に引き継ぐこととする。

4.4 事務局

4.4.1 事務局

① 全国委員会の開催

大図研の運営についての諸決定を行うため、3回の全国委員会を開催した。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、全てオンラインもしくはメールでの会議とした。

② 常任委員会の開催

日常的な業務を遂行するため、ほぼ月に1回、常任委員会を開催した。委員の負担を軽減するために、特筆すべき報告事項以外は口頭報告を廃し、審議事項を集中的に議論する形とし、会議時間の短縮を行った。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、全てオンラインもしくはメール審議での会議とした。

③ 大図研出版物の作業手順見直し

引き続き、大図研出版物の製版・印刷・発

送作業を見直した。

④ 大図研ウェブサーバの見直し

大図研のウェブサーバで、グループ毎にセキュアにコンテンツが制御できる運用方法を検討し、移行準備作業に取りかかった。

4.4.2 事務局出版担当

事務局出版担当は、大図研出版部として、大図研出版物（会報・会誌）の団体・個人への販売を行った。なお、会誌について、48号以降、即時オープンアクセス化することとなったため、それに伴う販売中止の対応を行った。2023年6月30日現在の会報の購読者数は、149件154部である。

会報の購読期間を1-12月のみとすることとなったため、4-3月で購読していた団体の契約変更への対応を行った。その結果、12件中3件（いずれも大学図書館）が購読中止となった。

会報の販売および販売管理のアウトソーシングを実施する予定であったが、諸事情により1年延期することとした。出版物在庫（会報・会誌・シリーズ）について、全国委員会の方針に沿って廃棄処分を行った。

2023年10月からスタートするインボイス制度について、当研究会の対応を検討した結果、当面は引き続き「免税事業者」のままとすることとした。

4.4.3 事務局会計担当

事務局会計担当は、事務局内の各担当と連携して経理業務を行った。

過年度の助成金送金に関する照会に回答した。

4.4.4 事務局会費徴収担当

事務局会費徴収担当では、会費の收受、納入状況の管理のほか、所定スケジュールに沿って、地域グループへのグループ活動費の送金、次年度会費の納入依頼、未納者や除籍

者への督促等を行った。その際、事務局組織担当および事務局会計担当と連携して業務を遂行した。

4.4.5 事務局組織担当

事務局組織担当は、会員の入退会の手続き、会員名簿やメーリングリストの維持・管理を行った。

会員に係る入退会の処理フローに則り、迅速な事務処理、各グループとの正確な情報共有に努めた。

出版物のデジタル頒布については、新規会員へのアクセス情報の周知、アクセス情報を失念した会員への対応を行った。

会員情報に変更があった場合の対応、また新規会員募集について、会報に記事を掲載し周知に努めた。

【第2号議案】

第53期（2022/2023年度）決算報告・会計監査報告

【凡例】

- 全ての表の単位は「円」である。
- 差引額の「▲」は、マイナスであることを表す。
- 収入の部の「▲」は、予算額に達していない状態であることを示す。
- 支出の部の「▲」は、予算額以上に支出があった状態であることを示す。
- 備考欄の注記は基本的には決算額に対しての説明である。

1. 2022/2023年度一般財政決算報告

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (決算－予算)	備考
前年度より繰越	6,192,386	6,192,386	0	
会費	1,705,000	1,700,000	5,000	注 ¹
雑収入	124,065	120,000	4,065	注 ²
出版財政より繰入	0	0	0	
大会基金より繰入	141,015	0	141,015	
合計	8,162,466	8,012,386	150,080	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (予算－決算)	備考
印刷費	2,465	20,000	17,535	注 ³
発送委託費	0	0	0	注 ⁴
通信費	52,605	250,000	197,395	注 ⁵
交通費	0	450,000	450,000	注 ⁶
編集費	3,500	32,000	28,500	注 ⁷
助成金	205,000	205,000	0	注 ⁸
研究活動費	30,000	140,000	110,000	注 ⁹
会議費	58,070	77,000	18,930	注 ¹⁰
消耗品費	4,069	10,000	5,931	注 ¹¹
雑費	2,805	110,000	107,195	注 ¹²
予備費	0	6,718,386	6,718,386	
次年度繰越	7,803,952	0	▲ 7,803,952	
合計	8,162,466	8,012,386	▲ 150,080	

【注】

¹ 6月末時点の累計額、341名分。うち、前納（2023/2024年度以降）分156名、当年度（2022/2023年度）分152名、前年度（2021/2022年度）以前分33名。予算額は会員340名分

² 旧埼玉地域グループ活動費寄附（119,320円）、銀行利子（60円）、大図研オープンカレッジ参加費収入（4,685円）。

³ デジタル化出版物ダウンロード案内等印刷費

⁴ 会報発送関連支出を出版財政に移管したため、発送委託費発生せず

- ⁵ デジタル化出版物ダウンロード案内郵送費、会報執筆御礼郵送費、資料等郵送費、会費納入依頼等会員通知郵送費、大図研webページ関連費用（サーバレンタル費、ドメインネーム費）
- ⁶ 全国委員会、常任委員会、会計監査ともにすべてオンライン開催のため、交通費発生せず
- ⁷ 会報2022年9、11月号非会員執筆者謝礼
- ⁸ 地域グループ会員70名以上52,000円×1（東京）、地域グループ会員69-30名27,000円×3（京都・大阪・九州）、地域グループ会員29-20名18,000円×2（東海・兵庫）、地域グループ会員19-5名12,000円×3（北海道・千葉・広島）で算定・配分。ただし、東京地域グループが17,000円増額（前年度比）を辞退したため、同額を2分した金額を兵庫・広島地域グループにそれぞれに配分
- ⁹ 長期的研究グループ20,000円×1、大図研オープンカレッジ（DOC）講師謝礼10,000円×1
- ¹⁰ Zoom利用料22,110円、Office365利用料8,580円、事務局外部委託費用27,380円（いずれも年払）
- ¹¹ 出版物ID/PW通知はがき用目隠しシール、会計書類整理・保管用品
- ¹² 銀行口座振込手数料、ゆうちょダイレクトトークン発行手数料

2. 2022/2023年度大会基金決算報告

100万円を超えた場合は、一般財政へ繰り入れる。

【収入の部】

費目	決算額	予算額	差引額 (決算－予算)	備考
前年度より繰越	900,000	900,000	0	
一般財政より戻り	241,015	100,000	141,015	注 ¹³
雑収入	0	0	0	
合計	1,141,015	1,000,000	141,015	

【支出の部】

費目	決算額	予算額	差引額 (予算－決算)	備考
今年度大会会計へ支出	0	0	0	
来年度大会会計へ支出	500,000	350,000	0	注 ¹⁴
一般財政へ支出	141,015	0	▲ 141,015	
雑費	0	0	0	
次年度繰越	500,000	650,000	0	
合計	1,141,015	1,000,000	▲ 141,015	

【注】

¹³ 第53回大会（オンライン）から戻り分

¹⁴ 第54回全国大会会計に支出

3. 2022/2023年度出版財政決算報告

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (決算－予算)	備考
前年度より繰越	3,787,621	3,787,621	0	
刊行物収入	952,590	848,000	104,590	注 ¹⁵
広告料収入	0	0	0	
雑収入	1,425	0	1,425	注 ¹⁶
合計	4,741,636	4,635,621	106,015	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (予算－決算)	備考
印刷費	918,170	1,060,000	141,830	注 ¹⁷
発送委託費	33,152	34,000	848	注 ¹⁸
通信費	335,489	350,000	14,511	注 ¹⁹
消耗品費	10,594	10,000	▲594	注 ²⁰
宣伝費	0	10,000	10,000	
会議費	0	0	0	
雑費	3,874	10,000	6,126	注 ²¹
組入金	0	0	0	
会報発送委託費	0	0	0	
会報発送費	0	0	0	
出版物販売委託費	0	150,000	150,000	
予備費	0	3,011,621	3,011,621	
次年度繰越	3,440,357	0	▲3,440,357	
合計	4,741,636	4,635,621	▲106,015	

【注】

¹⁵ 『大学の図書館』（以下、会報）943,950円（139件）、『大学図書館研究会誌』（以下、会誌）8,640円（5件）

¹⁶ 大会ちらし封入費（大会会計より送金）、預金利息

¹⁷ 会報2022年6月号（41巻6号）-2023年5月号（42巻5号）、封筒など

¹⁸ 会報2022年6月号（41巻6号）-2023年5月号（42巻5号）

¹⁹ 会報2022年6月号（41巻6号）-2023年5月号（42巻5号）、請求書送料など

²⁰ OPP袋、ラベル用紙

²¹ 振込手数料、大会ちらし封入費（大会会計の立替）

4. 2022/2023年度五十周年事業基金報告

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (決算 - 予算)	備考
前年度より繰越	895,514	895,514	0	
雑収入	0	0	0	
合計	895,514	895,514	0	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (予算 - 決算)	備考
記念出版物編集委員会	0	895,514	895,514	
海外図書館研修ツアー 検討委員会	0	0	0	
次年度繰越	895,514	0	▲ 895,514	
合計	895,514	895,514	0	

5. 2021/2022年度会計監査報告

大学図書館研究会 2022/2023年度 会計監査報告

2022/2023年度一般財政・出版財政に係る決算及び関係書類について監査した結果、い
ずれも適正に執行されていることを確認しましたので、ご報告いたします。

【監査所見】

前年度の監査所見において要望したとおり、監査資料については、表計算ソフト形式での事
前提示や資料への詳細説明の記載があったため、効率的かつ確実に確認を進めることができ
た。

[一般財政]

会費徴収においては昨年度に引き続き、滞納会費の督促や超過納入者への連絡等、細やか
な対応がなされ、会費未納の解消につながっている点を高く評価する。

Microsoft Office365 などのオンラインツールや、事務局外部委託にかかわる費用につ
いては、費目の見直しが必要と思われるため、検討してほしい。


当年度の支出額については、大会や会議のオンライン開催により、会議費・交通費等の大幅な
縮減となっているが、今後、オンラインと対面併用での運営予算についてのあり方も模索して
いただきたい。


[出版財政]

業務のアウトソーシング等により安定的な運営を図っていることは評価するが、支出が収入
を大幅に超えていることから、今後においては印刷物発行費用の縮減や、収入増を図る必要
があると考ええる。

2023年7月31日

大学図書館研究会会計監査人

伊賀 由紀子 

立原 ゆり 

【第3号議案】

第54期（2023/2024年度）活動計画案

地域グループ及び研究グループを核として活動を行う。地域グループは、北海道、千葉、東京、東海、京都、大阪、兵庫、広島、九州の9グループで構成される。

研究グループは、長期的研究グループとして学術基盤整備研究グループが前年から活動を継続している。

会費は、前年度に引き続き、一括徴収方式を採用。2016/2017年度より前（支部制）の未徴収会費については引き続き、地域グループが責任をもって徴収する。

1. 常任委員会

常任委員会の運営方法を引き続き検討する。原則として、オンライン会議とする。

試行的に2ヶ月に1回の開催とすることで、委員の負担軽減を図り、また、特定常任委員や運営サポート会員の協力のもと、効率的かつ円滑な運営を心がける。

1.1 全国大会委員会

引き続き、実行委員会形式で全国大会を企画し運営する。今後も、広く会員から実行委員を募ることにより、企画と運営に関わる機会を提供するとともに、当会の主要な行事として、安定した開催に努める。また、全国大会WGから、全国大会運営マニュアルの整備と運用を引き継ぐ。

1.2 研究企画委員会

大図研オープンカレッジ企画については、地域グループ・研究グループとの共催を含めて運営サポート会員の募集を行い、魅力的な企画運営と安定的な体制づくりを継続する。

地域グループ・研究グループは年度毎の募集を行う。オンライン形式での会議や研修会

企画などを含めた活動を支援する。

1.3 会報編集委員会

- ① 会報のあり方を特集企画担当者およびグループと引き続き共有する。
- ② 確実な発行サイクルを堅持でき、かつ毎月25日に確実に刊行出来るよう、引き続き行程を見直す。
- ③ 会員からの投稿をより積極的に呼び掛ける。
- ④ 目次情報の正規化に努める。

1.4 会誌編集委員会

オープンアクセス化に伴い、会誌のオープンアクセス公開ルールを策定し、その内容に従って、投稿規程、編集手順、ウェブ構成の見直しを進める。

論文投稿（査読有り）の受付再開に向け、受付体制を整備し（執筆要領の改定を含む）、また、適切な手順に従って査読を進めるために査読マニュアルを作成するとともに、刊行遅延が発生しないように、編集スケジュールを再考する。

1.5 広報委員会

- 大学図書館研究会ウェブサイトの利便性向上を目指し、事務局の大図研ウェブサーバの見直しと連携し、サイトのリニューアルを検討する。
- ウェブサイト、メーリングリストおよびSNSの活用を通じて、大図研の迅速な情報提供に務めるとともに、新会員獲得の一助となる情報の提供を行う。

2. 五十周年記念事業

2.1 記念出版物編集委員会

現在整理中の原稿（地域グループ、大図研全体の活動経緯に関する「記録資料」の部分）を完成させるほか、未着手である「大図研の活動の振り返り」の原稿作成及び「寄稿」の依頼を進め、全体の原稿をそろえ、構成を組み、今年度中に発行する。

3. 事務局

3.1 事務局

① 全国委員会の開催

大図研の運営についての諸決定を行うため、全5回程度の全国委員会を引き続き開催する。原則としてオンライン開催とする。

② 常任委員会の開催

日常的な業務を遂行するため、引き続き常任委員会を開催する。原則としてオンライン開催とし、審議すべき事項を絞り込み、委員のより一層の負担軽減に務める。

③ 大図研出版物の作業手順見直し

引き続き、大図研出版物の製版・印刷・発送作業を見直し、より低コストで省力化が図れるよう、事務局出版担当及び事務局組織担当と協議の上、検討する。

④ 大図研会員への勧誘

大図研およびグループが開催する行事に、入会案内を配布する等、積極的に大図研の存在をアピールする。

⑤ 大図研ウェブサーバの見直し

グループ毎にセキュアにコンテンツが制御できる新サーバに完全移行する。

3.2 事務局出版担当

大図研出版部として、引き続き会報の団体・個人への販売を行う。

2023年11月より、会報の販売および販売管理のアウトソーシングを行う。

3.3 事務局会計担当

引続き、事務局内の各担当と連携し、業務

を遂行する。

また、事務局で管理する金券の今後の扱いについて検討・対応する。

さらに、立替払等について早期の申請を引き続き促し、予算執行状況を可視化するとともに、伝票類の散逸を防ぎ、業務の合理化および健全化を一層推進する。

3.4 事務局会費徴収担当

従来の業務フローを确实、適切に実施するとともに、納入率の向上を目指す方策を引き続き検討する。

3.5 事務局組織担当

事務局組織担当業務（会員に係る手続き、会員名簿やメーリングリストの維持・管理、地域および研究グループとの会員情報共有など）を迅速かつ确实に実施する。

会員情報の変更があった場合の対応方法について、会報やメーリングリストで定期的に周知し、会員情報のアップデートに努める。

【第4号議案】

第54期（2023/2024年度）予算案

【凡例】

- 全ての表の単位は「円」である。
- 差引額の「▲」は、マイナスであることを表し、前年度予算額よりも少額である状態であることを示す。

1. 2023/2024年度一般財政予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
前年度より繰越	7,803,952	6,192,386	1,611,566	6,192,386	
会費	1,700,000	1,700,000	0	1,705,000	注 ²²
雑収入	10,000	120,000	▲ 110,000	124,065	注 ²³
大会基金より繰入	0	0	0	141,015	
合計	9,513,952	8,012,386	1,501,566	8,162,466	

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
印刷費	20,000	20,000	0	2,465	注 ²⁴
通信費	250,000	250,000	0	52,605	注 ²⁵
交通費	450,000	450,000	0	0	注 ²⁶
編集費	32,000	32,000	0	3,500	注 ²⁷
助成金	190,000	205,000	▲ 15,000	205,000	注 ²⁸
研究活動費	140,000	140,000	0	30,000	注 ²⁹
会議費	77,000	77,000	0	58,070	注 ³⁰
事務管理費	21,000	0	21,000	0	注 ³¹
消耗品費	10,000	10,000	0	4,069	
雑費	30,000	110,000	▲ 80,000	2,805	注 ³²
予備費	8,293,952	6,718,386	1,575,566	0	
次年度繰越	0	0	0	7,803,952	
合計	9,513,952	8,012,386	1,501,566	8,162,466	

【注】

²² 会員340名分で算出²³ 全国大会収入、大図研オープンカレッジ参加費²⁴ 会員通知用宛名ラベル印刷費等²⁵ 各種資料送料、会費納入通知送料等²⁶ 全国委員会250,000円×1回、常任委員会40,000円×2回、会計監査120,000円×1回²⁷ 非会員会報執筆者への謝礼1,000円×12、外部査読費20,000円²⁸ 地域グループ会員70名以上52,000円×1（東京）、地域グループ会員69-30名27,000円×2（京都・九州）、地域グループ会員29-20名18,000円×2（大阪・広島）、地域グループ会員19-5名12,000円×4（北海道・

千葉・東海・兵庫)。

²⁹ 長期的研究グループ20,000円×1、萌芽的研究グループ10,000円×0、講演等テープ起こし30,000円、関東・近畿合同例会テープ起こし20,000円×2、大図研オープンカレッジ関係費20,000円、その他研究活動費等

³⁰ オンライン会議費2,000円×12ヶ月分、会場費4,000円×4（全国委員会1回+常任委員会2回+会計監査1回）、全国大会 backlog 費、会議予備費

³¹ 事務局外注費12,000円、常任委員会情報共有MS365費9,000円

³² 会報印刷費・交通費等口座振込手数料等10,000円、表彰制度設計等20,000円

2. 2023/2024年度大会基金予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
前年度より繰越	500,000	900,000	▲ 400,000	900,000	
一般財政より戻り	500,000	100,000	400,000	241,015	注 ³³
雑収入	0	0	0	0	
合計	1,000,000	1,000,000	0	1,141,015	

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
今年度大会会計へ支出	0	0	0	0	
来年度大会会計へ支出	500,000	350,000	150,000	500,000	注 ³⁴
一般財政へ支出	0	0	0	141,015	
雑費	0	0	0	0	
次年度繰越	500,000	650,000	▲ 150,000	500,000	
合計	1,000,000	1,000,000	0	1,141,015	

【注】

³³ 第54回全国大会から戻り分

³⁴ 第55回全国大会準備金

3. 2023/2024年度出版財政予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
前年度より繰越	3,440,357	3,787,621	▲ 347,264	3,787,621	
刊行物収入	885,600	848,000	37,600	952,590	注 ³⁵
広告料収入	0	0	0	0	
雑収入	0	0	0	1,425	
合計	4,325,957	4,635,621	▲ 309,664	4,741,636	

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
印刷費	1,360,000	1,060,000	300,000	918,170	注 ³⁶
発送委託費	33,000	34,000	▲ 1,000	33,152	注 ³⁷
通信費	320,000	350,000	▲ 30,000	335,489	注 ³⁸
消耗品費	10,000	10,000	0	10,594	
宣伝費	10,000	10,000	0	0	
会議費	0	0	0	0	
雑費	10,000	10,000	0	3,874	
出版物販売委託費	150,000	150,000	0	0	
予備費	2,432,957	3,011,621	▲ 578,664	0	
次年度繰越	0	0	0	3,440,357	
合計	4,325,957	4,635,621	▲ 309,664	4,741,636	

【注】

³⁵ 会報42・43巻891,600円（機関98件×6,000円、書店54件×5,400円、個人1件×6,000円）

³⁶ 会報印刷費@407×月平均印刷213部×12ヶ月分×消費税1.1、会誌印刷費200,000円、封筒等印刷費10,000円

³⁷ 宛名ラベル単価@16×月平均発送156部×12ヶ月分×消費税1.1

³⁸ 会報発送単価@135×月平均発送156部×12ヶ月分×消費税1.1、印刷残部出版部宛返送単価@1,000×12ヶ月分×消費税1.1、請求書送料等

4. 2023/2024年度五十周年事業基金予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
前年度より繰越	895,514	895,514	0	895,514	
雑収入	0	0	0	0	
合計	895,514	895,514	0	895,514	

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
記念出版物編集 委員会	895,514	895,514	0	0	注 ³⁹
次年度繰越	0	0	0	895,514	
合計	895,514	895,514	0	895,514	

【注】
³⁹ 記念出版物刊行費、会議費等

【第5号議案】

第54期（2023/2024年度）役員案

●全国委員（22名）

項番	氏名	所属	グループ名	委員種別
1	青山 史 絵	東洋英和女学院大学	東京	常任（特定）
2	赤澤 久 弥	京都大学	京都	常任
3	有馬 良 一	神戸大学	兵庫	常任
4	磯本 善 男	放送大学	北海道	常任（特定）
5	上村 順 一	琉球大学	東京・学術基盤整備	常任
6	柿原 友 紀	熊本大学	九州	地域グループ推薦
7	楫 幸 子	安田女子大学	広島・学術基盤整備	研究グループ推薦
8	加藤 晃 一	千葉大学	千葉	地域グループ推薦
9	北川 正 路	東京慈恵会医科大学	東京	常任
10	小林 泰 名	北海道大学	北海道	地域グループ推薦
11	小山 莊太郎	横浜国立大学	東海・京都・大阪・兵庫	常任
12	澤木 恵	信州大学	東京・学術基盤整備	常任（特定）
13	下山 朋 幸	（所属先非公開）	東京・学術基盤整備	地域グループ推薦
14	諏訪 有 香	高知学園大学高知学園 短期大学	広島・学術基盤整備	地域グループ推薦
15	徳田 恵 里	紀伊國屋書店	兵庫	地域グループ推薦
16	呑海 沙 織	筑波大学	東京	常任
17	中川 恵理子	金沢学院大学	東海	地域グループ推薦
18	中筋 知 恵	小樽商科大学	北海道	常任（特定）
19	山上 朋 宏	京都大学	京都	地域グループ推薦
20	吉田 弥 生	大阪大学	大阪	地域グループ推薦
21	渡邊 伸 彦	京都大学	京都	常任（特定）
22	和知 剛	郡山女子大学	学術基盤整備	常任

●会計監査（2名）

項番	氏名	所属	グループ名
1	伊賀 由紀子	大阪公立大学	大阪
2	立原 ゆり	東京大学	東京

【参考】大学図書館研究会会則（抄）

（全国委員会）

第9条 この会に会長1名を含む委員15名以上30名以内からなる全国委員会をおき、会務を担当します。

- 2 全国委員は会員総会において選出し、選出された委員は会長を互選します。
- 3 全国委員は会務を分担し、その任期は1年とし再任をさまたげません。
- 4 全国委員会は委員の過半数の出席により成立し、議決は出席委員の3分の2以上の賛成を必要とします。

第54回全国大会 決算報告

【凡例】

- ・全ての表の単位は「円」である。
- ・差引額の「▲」は、マイナスであることを表す。

〈収入の部〉

費目	決算額	決算備考	予算額	予算備考	差引額
参加費	358,236	@6,000*52名(2日または3日参加) @3,000*24名(1日参加) ※うち74名分はPeatix手数料@25,554、振込手数料@210の@25,764を控除 @6,000*2名は直接大会口座に振込	362,760	@6,000*50名(全日参加) @3,000*30名(1日参加) ※Peatix手数料(有料チケット分):販売実績の4.9%+99円/枚+振込手数料210円として27,240円を控除	▲ 4,524
交流会費	0	飲食を伴わないため不要	0	飲食を伴わないため不要	0
広告費	241,000	@10,000*14社、@30,000*1社、@33,000*1社、@38,000*1社	190,000	@10,000*13社、@20,000*3社	51,000
大会基金 より繰入	500,000		500,000		0
合計	1,099,236		1,052,760		46,476

〈支出の部〉

費目	決算額	決算備考	予算額	予算備考	差引額
会場費	123,638	・9/3 大阪大学会館リハーサル会場借用費 @17,400 ・Zoom one プロライセンス1ヶ月分@(2,125+税)*14ホスト ・当日会場借用費 @103,900	150,000	・現地会場費 ・Zoom Proホストライセンス1か月分@2,200*1ホスト ・ウェビナーオプション1ヶ月分@10,700*1ホストor 大規模オプション@7,370円*1ヶ月	▲ 26,362
交流会費	0	飲食を伴わないため不要	0	飲食を伴わないため不要	0
機器費	127,773	配信用機器レンタル費用(wi-fi含む)	200,000	配信用機器レンタル費用(wi-fi含む)	▲ 72,227
印刷費	11,628	会報封入大会チラシ印刷費、会報封入費、当日資料印刷費(配布資料、打合せ資料、掲示物)、協賛企業への議案書号送付かがみ印刷費	4,000	会報封入大会チラシ印刷費、会報封入費用	7,628
講師交通費	80,000	記念講演講師分として @20,000*1名 分科会講師分として @5,000*4名 シンポジウム講演講師分として @20,000*2名	75,000	記念講演講師分として @20,000*1名 分科会講師分として @5,000*3名 シンポジウム講演講師分として @20,000*2名	5,000
消耗品費	7,125	資料配布用バッグ購入費、名札購入費、会場使用物品購入費	3,000	文房具購入費用。大会バッグは作成しない	4,125
通信費	18,283	協賛企業宛会報送料、欠席者宛当日資料送料、レンタル機器返送料、会場への名札送料	3,000	協賛企業宛書類郵送費用ほか	15,283
予稿集作成費	0	PDF(内製)で発行	70,000	印刷する場合	▲ 70,000
実行委員会費	62,238	実行委員の諸費用 ・Backlog スタータープラン(年契約5%割引、2023/07/15-2024/07/14)として @33,858 ・オンライン配信機器使用リハーサル時担当者往復交通費	40,000	実行委員の諸費用 Backlog スタータープラン料金(2023/07/15-2024/07/14)として @35,640	22,238
予備費	2,475	振込手数料	7,760	振込手数料はここに含める	▲ 5,285
大会基金戻入	500,000		500,000		0
小計	933,160		1,052,760		▲ 119,600
大阪地域グループ繰入	55,359		0		55,359
一般財政繰入	110,717		0		110,717
合計	1,099,236		1,052,760		46,476

第54回全国大会 参加申込者名簿

Yoko Aiba (グループ無所属)	諏訪 有香 (広島)
赤澤 久弥 (京都)	武智 則之 (非会員)
有馬 良一 (兵庫)	辰巳 恒子 (非会員)
伊賀 由紀子 (大阪)	田辺 浩介 (東京・学術基盤整備)
池松 果実 (非会員)	堤 美智子 (京都)
石村 早紀 (非会員)	寺島 陽子 (大阪)
磯崎 みつよ (東京)	DUTKA MALGORZATA (グループ無所属)
井上 貴之 (東海)	徳田 恵里 (兵庫)
井上 昌彦 (兵庫)	戸田 あきら (グループ無所属)
今野 創祐 (京都)	中川 恵理子 (東海)
井村 邦博 (京都)	長坂 和茂 (京都)
岩井 雅史 (グループ無所属)	長瀬 広和 (非会員)
上村 順一 (東京・学術基盤整備)	中野 みちる (非会員)
江良 友子 (非会員)	南雲 知也 (東京)
岡田 智佳子 (グループ無所属)	西 蘭 由依 (九州)
小川 ゆきえ (九州)	野間口 真裕 (京都・学術基盤整備)
加川 みどり (兵庫)	野村 健 (東京)
柿原 友紀 (九州)	花崎 佳代子 (兵庫)
楫 幸子 (広島・学術基盤整備)	春名 理史 (非会員)
加藤 晃一 (千葉)	日高 正太郎 (非会員)
河合 美紀 (非会員)	前川 敦子 (大阪)
川崎 陽奈 (九州)	前田 郁子 (大阪・学術基盤整備)
北川 正路 (東京)	松野 高德 (東海・学術基盤整備)
久世 さとみ (非会員)	松原 恵 (東京)
久保山 健 (大阪)	宮入 暢子 (非会員)
熊野 智之 (非会員)	六車 彩都子 (兵庫)
河野 由香里 (北海道)	山上 朋宏 (京都)
小陳 左和子 (非会員)	山口 友里子 (東京)
小林 明博 (大阪)	山下 大輔 (九州)
小林 泰名 (北海道)	山下 真佑美 (広島)
小村 愛美 (大阪)	吉田 弥生 (大阪)
小山 荘太郎 (東海・京都・大阪・兵庫)	吉本 龍司 (非会員)
坂田 絵理子 (非会員)	若狭 あや (京都)
坂本 里栄 (九州)	若松 克尚 (非会員)
佐藤 正恵 (千葉)	渡邊 斉志 (非会員)
澤木 恵 (東京・学術基盤整備)	渡邊 伸彦 (京都)
下山 朋幸 (東京・学術基盤整備)	渡邊 さよ (広島)
諏訪 敏幸 (大阪)	渡辺 哲成 (非会員)
住谷 朝子 (非会員)	

第54回全国大会 運営役員名簿

実行委員長：

山口友里子（東京地域グループ・一橋大学）

副実行委員長：

赤澤 久弥（京都地域グループ・京都大学）

事務局長：

上村 順一（東京地域グループ・琉球大学）

委員：

相場 洋子（国際教養大学）

有馬 良一（兵庫地域グループ・神戸大学）

安東 正玄（京都地域グループ・立命館大学）

伊賀由紀子（大阪地域グループ・大阪公立大学）

加川みどり（兵庫地域グループ・

神戸松蔭女子学院大学）

北川 正路（東京地域グループ・東京慈恵会医科大学）

小村 愛美（大阪地域グループ・大阪大学）

小林 泰名（北海道地域グループ・北海道大学）

小山莊太郎（東海・京都・大阪・兵庫地域グループ・

横浜国立大学）

澤木 恵（東京地域グループ・

学術基盤整備研究グループ・信州大学）

徳田 恵里（兵庫地域グループ・

株式会社紀伊國屋書店）

松原 恵（東京地域グループ・国立情報学研究所）

六車彩都子（兵庫地域グループ・大阪大学）

山下真佑美（広島地域グループ・

広島商船高等専門学校）

山田 美雪（兵庫県立大学）

吉田 弥生（大阪地域グループ・大阪大学）

渡邊 伸彦（京都地域グループ・京都大学）

和知 剛（学術基盤整備研究グループ・

郡山女子大学）

運営協力：

佐藤 知生（国立情報学研究所）

216 大学の図書館 42巻12号 No.601

大学の図書館 第42巻第12号 (No.601) 2023年12月25日 (毎月25日発行) ISSN : 0286-6854
編集・発行 : 大学図書館研究会 年間予約購読料 : 送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒305-0033 茨城県つくば市東新井10-1-111 マザータンク気付

E-mail : shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> 三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座 : 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F

E-mail : dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00190-2-79769 大学図書館研究会

議事要録

2023/2024年度 第3回常任委員会

日時 : 2023年12月9日 (土) 10:00-11:05

場所 : Zoom

出席者 (敬称略) :

呑海, 赤澤, 上村, 有馬, 北川, 小山, 和知 (以上, 常任委員),
青山, 磯本 (以上, 常任 (特定) 委員),

2023/2024年度 第2回全国委員会

日時 : 2023年12月24日 (土) 9:10-11:30

場所 : Zoom

出席者 (敬称略) :

小林[北海道地域], 加藤[千葉地域], 下山[東京地域], 中川[東海地域], 山上[京都地域], 小山[大阪地域 (代理)], 徳田[兵庫地域], 諏訪[広島地域], 柿原[九州地域], 楫[学術基盤整備研究] (以上, グループ推薦全国委員),
呑海, 赤澤, 有馬, 上村, 小山, 和知 (以上, 常任委員),
青山, 磯本, 中筋 (以上, 常任 (特定) 委員)